

2024年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

特集：ポストコロナにおけるスポーツ振興
～これまでの取り組みと今後の展望～

須田芳正君 福士徳文君
「サッカー本大賞 2024」優秀作品に選出

村山光義君
公益社団法人全国大学体育連合 令和6年度 大学体育教育賞 受賞

村松憲君
公益財団法人日本テニス協会 功労賞 受賞

清水花菜君
「服部真二スポーツ賞 Inspiring Coach」受賞

目 次

「巻 頭 言」 所長 須田芳正	1
I. 特集	
ポストコロナにおけるスポーツ振興～これまでの取り組みと今後の展望～	3
須田芳正君 福士徳文君「サッカー本大賞2024」優秀作品に選出	5
村山光義君 公益社団法人全国大学体育連合 令和6年度 大学体育教育賞 受賞	6
村松憲君 公益財団法人日本テニス協会 功労賞 受賞	7
清水花菜君「服部真二スポーツ賞 Inspiring Coach」受賞	8
II. 研究活動記録（研究委員会）	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	10
2. 所内定例研究会発表要旨	24
3. 大学体育指導者全国研修会参加報告	29
4. 浅野均一記念研究奨励金・所内研究・学事振興基金・潮田基金報告書	33
III. 教育活動記録	
III―1. 授業の実施（教育委員会）	
1. 2024年度体育科目の履修者統計	50
2. 授業評価の実施	55
3. 通信教育対象科目	60
4. 塾内における授業担当	60
III―2. スポーツイベントの開催	
1. 塾内競技大会	61
2. 公開講座	63
3. 所内施設の開放	64
III―3. 他機関との連携	
1. 一貫校連携	66
2. 体育会支援	66
IV. 業務活動記録（渡部隆志 主事）	68

巻 頭 言

慶應義塾大学体育研究所

所 長 須 田 芳 正

この度、2024年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書を発行することができました。この一年間実施してまいりました体育研究所の研究、教育、スポーツ振興の各活動をここにご紹介させていただきます。所員はもちろんのことですが、それぞれに数多くの方々のご支援ご協力を賜りました。この場をお借りして関係各位に深く感謝し御礼申し上げます。

2024年は、オリンピック、パラリンピックがパリにて開催され日本国中大いに盛り上がりました。塾関係者からは7名の選手、2名の監督が出場され、様々な競技で大活躍を見せ、メダルも獲得しました。心から敬意を表するとともに、文武双全を貫いている人が身近にいることを誇りに思い、これからも益々の活躍を願っております。

本年度の体育科目全体の履修者数は6,908名となりました。体育科目には実技、講義、演習があり、様々な種目や講義内容を取り入れて実施していますが、それらの共通点はコミュニケーションの場ということです。塾生にとって学生間や教員と学生間の人間関係を通じて塾風を感じ、理解することが重要であり、我々教員が体育科目の授業において塾風を周知し、伝承して、浸透させることが体育研究所の使命だと考えております。したがって、一人でも多くの塾生が体育科目を履修してくれるように魅力ある授業を展開してまいりたいと思います。

弊所には19名の専任教員が在籍しております。私の持論として「組織というのは個の集団なので、個が秀逸なら組織の発展につながる」と考えています。したがって、各所員が自分の教育、研究分野で突出していくことが、体育研究所の発展、そして塾の体育・スポーツの発展につながるのです。本年度も各所員は教育、研究に邁進してまいりました。特に若手所員の活躍が目立った年なので、いくつかご紹介したいと思います。

- ・ 福士徳文君がアジア大学サッカー大会で U-20 全日本大学サッカー選抜監督として出場し、日本チームを優勝に導きました。
- ・ 東原綾子君が世界トップクラスの整形外科およびスポーツ医学の専門病院であるカタールのアスペター病院が主催する国際カンファレンスで「ハムストリングス肉離れ」に関する専門家として招待され、カタールのハリーファ国際スタジアムにて講演を行いました。
- ・ 清水花菜君が服部真二文化・スポーツ財団 第7回のスポーツ賞 (Inspiring Coach) を受賞しました。日頃より新体操競技のジュニア世代の指導に尽力し、女性アスリートの育成・強化と指導法の研究に取り組んでいる点が高く評価されました。
- ・ 稲見崇孝君らの研究チームは、ジャンプ高に影響を与えないセグメントの変位を基にスマートフォンを用いてジャンプ高を算出する手法を開発しました。

所員の今後の更なる活躍にご期待ください。

以 上

I. 特集

ポストコロナにおけるスポーツ振興 ～これまでの取り組みと今後の展望～

1. 体育研究所のスポーツ振興の取り組み

体育研究所では、塾生や教職員を対象としたスポーツイベントの開催に加え、地域に向けた公開講座やイベントを企画し、スポーツ振興を推進してきた。特に、地域社会におけるスポーツ活動の普及は、大学の社会的責任の一環としても重要であり、研究と実践を結びつける場としての役割を果たしている。

コロナ禍では、多くのスポーツ活動が制限され、対面でのイベント開催が難しい状況が続いた。しかし、オンライン講座の導入や、少人数制での開催を模索することで、活動を完全に止めることなく継続する工夫を行った。そして、コロナ明けには、感染対策を講じながら少しずつイベントを再開し、2023年度以降は通常通りの開催が可能となった。

2. コロナ禍以降のイベント開催の概要と傾向

- ・2022年：日吉記念館の建て替え工事に加え、コロナ禍の影響で日吉記念館でのスポーツイベントは、2018年から開催できていなかった。そのため、2022年度は参加者数が少ない中での再スタートとなり、学生のスポーツ活動実施機会の創出と共に、認知度向上を図る必要性を実感した。
- ・2023年：前年度の開催実績に加え、体育科目（授業）での宣伝、各種広報活動によりフットサル・バレーボール大会の参加者が

増加し、活気が戻る。放送研究会の実況導入により、イベントがさらに盛り上がった。

- ・2024年：継続開催ができていたフットサル大会、バレーボール大会では参加者数が大幅に増加し、コロナ前の水準に回復。特にバレーボール大会では、参加チーム数が過去3年間で最多の27チームに達した。友人同士での参加はもちろん、サークルをベースにした参加も多く、スポーツ系サークルの成果発揮の場としても貢献した（表1）。

3. 塾内競技大会の概要と展望

塾内競技大会は、塾生・教職員が一堂に会し、スポーツを通じた交流を深める伝統的なイベントで、塾内に向けたスポーツ振興の主軸となっている。「塾長杯」の冠が付く各種競技大会と、塾員が唯一参加できる大会として「塾内卓球大会」を開催している。コロナ禍で一時的に規模が縮小されたが、2024年度は各種制限のない形で実施でき、多くの参加者がスポーツを楽しむ機会となった。

2022～2024年度のスポーツ大会参加者数の推移を見ると、どの大会も参加者が増加傾向にあり、特にバレーボール大会はここ3年間で最多の27チーム・191名が参加した。卓球大会も毎年継続的に開催され、参加者数が増加傾向にある。以下に、年度ごとの推移を示す。

表1 2022～2024年度の塾長杯スポーツイベント 参加者推移

年度	フットサル大会		バレーボール大会		卓球大会
	チーム数	参加者数	チーム数	参加者数	参加者数
2022	8	67	11	79	12
2023	11	89	18	118	33
2024	15	135	27	191	31

また、2023年にはバスケットボール大会、2024年にはバドミントン大会を開催し、それぞれ多くの参加者が集まった。参加者からは「毎年楽しみにしている」「たくさんゲームをしたい」「思い出を残せる」といった声が多く寄せられ、スポーツイベントが学生生活の一部として定着していることがうかがえる。2023年からは放送研究会の実況が加わり、大会の盛り上がりが一層増した。

今後は、これまでの取り組みをさらに活性化するとともに、時代に合わせた新たな試みも加え、塾内のスポーツ振興の一翼を担えるようさらに貢献していきたい。

4. 地域向け公開講座の概要と展望

公開講座は、地域住民へのスポーツ振興としてこれまで主に大人の方を対象に「ピラティス」や「ヨガ」を実施してきた。コロナ明け久々に開催した公開講座では、子ども達の運動量も減っていることに鑑み、地域の親子を対象とした「親子で体づくり（2023年）」

や「キッズ新体操体験（2024年）」を開催。特に、新体操体験では、男女を問わず参加者を募集し、スポーツの多様性を伝える機会となった。事後アンケートでは、「とても楽しいイベントだった」「もっと日吉でこうした講座を普及してほしい」といった声が寄せられ、地域住民の関心の高さがうかがえた。今後も、より多くの方が参加できる機会を提供し、地域のスポーツ振興に貢献していく。

5. 今後のスポーツ振興について

コロナ明けのスポーツ振興により、体育研究所の活動は再び大きく活性化した。イベント参加者数も回復し、スポーツを通じた交流の場が求められていることが明確になった。

体育研究所は、今後も塾生・教職員・地域住民がスポーツを通じて健康で豊かな生活を送るための場を提供し続ける。コロナ禍を乗り越えた今、新たな形でスポーツ振興を模索しながら、大学と地域社会の架け橋としての役割を果たしていきたい。



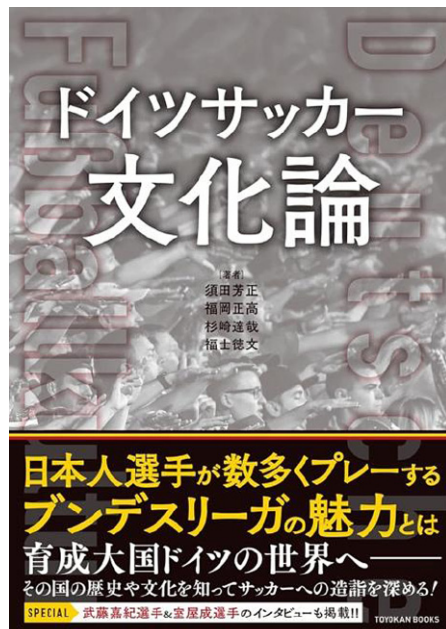
公開講座の様子（2023年）

須田芳正君 福士徳文君

「サッカー本大賞2024」優秀作品に選出

須田芳正君を筆頭著者とする書籍「ドイツサッカー文化論」が「サッカー本大賞2024」の優秀作品に選出されました。本書の一部は、福士徳文君も執筆を担当しております。

サッカー本大賞は、株式会社カンゼンが創設し、今回は2023年に発売されたサッカー本（読み物が対象。いわゆる技法書、テクニク本は選考対象外。）すべてを対象に選考委員によって決定され、11作品が優秀作品として選出されています。その優秀作品11作品の中から、大賞など各賞が発表され、惜しくも各賞には選出されませんでした。優秀作品として選出いただけたことに改めて感謝申し上げます。優秀作品受賞者コメントや、優秀作品全作の選評などは、以下の関連情報よりご覧いただければ幸いです。



ドイツサッカー文化論 表紙

【関連情報】

書籍詳細（慶應義塾大学メディアセンター（KOSMOS））

https://search.lib.keio.ac.jp/discovery/fulldisplay?context=L&vid=81SOKEI_KEIO:KEIO&search_scope=MyInstitution&tab=LibraryCatalog&docid=alma9926763964104034

サッカー本大賞詳細（株式会社カンゼンホームページ）

- サッカー本大賞2024優秀作品が決定 !!
<https://www.kanzen.jp/news/n104960.html>
- 第11回「サッカー本大賞2024」受賞者のコメントを紹介！
<https://www.footballchannel.jp/2024/04/24/post550978/>
- 第11回「サッカー本大賞2024」優秀作品全作の選評を紹介！
<https://www.footballchannel.jp/2024/04/25/post551239/>

村山光義君

公益社団法人全国大学体育連合 令和6年度 大学体育教育賞 受賞

公益社団法人全国大学体育連合大学体育教育賞を受賞して

村山 光義

2025年3月22日に公益社団法人全国大学体育連合（以下、大体連）より、大学体育教育賞を受賞いたしました。本賞は、大学体育に長く携わり、大学体育の発展に貢献した会員校所属教員等で、大体連において理事・監事の役職を6年以上務めた者に贈られるものです。

大体連は、1948年に体育教育が新制大学に必修として組み入れられたことを機に、1952年に大学における体育の内容や方法を協議する場として発足し、72年の歴史を持ちます。連合は大学が会員となり、所属する教員が研修会や研究フォーラムに参加する形で大学体育に関わる全国の情報交換がなされてきました。1991年の大学設置基準の大綱化によって保健体育科目は必修を外れましたが、大体連は「大学保健体育基本構想」（1991年改訂）を掲げ、大学における保健体育教育の重要性と意義を主張し、大学体育教員のさらなる連携・協力をリードしてきた組織です。

また、大体連の会長として、慶應義塾から石川忠雄先生（第3代：1977-1984年度）、安西祐一郎先生（第8代：2011-2022年度）、長谷山彰先生（第9代：2023年度から現在）の3名の塾長が務められてきています。つま

り、大体連と慶應義塾との関わりは大変深く、これまで体育研究所の諸先輩もその運営に携わり、また、毎年、研修会等に所員が参加してきています。このような大体連より、この度、大学体育教育賞をいただき、大変光栄に存じます。

私は、2007年から大体連の総務部に属し、2011年から理事として総務部長を2期（4年）務めました。この間、公益社団法人への移行を進め、定款や諸規程の改定や支部組織の1元管理など、組織の新たな体制づくりに奔走したことが思い出されます。また、2021年より将来構想委員会委員長として常務理事に復帰し、2期を務めました。1期目は創立70周年記念事業を推進するという役回り、記念のシンポジウム・講演会・式典などの企画運営を行いました。公益法人化と70周年という組織の節目に携わることができたのは、幸運な巡り合わせであったと感じます。

なお、2025年度より、専務理事として大体連を取りまとめることとなりました。本受賞を礎に、大学体育の発展に努めるとともに、体育研究所の体育教育ならびに慶應義塾における体育・スポーツの更なる充実に繋げるべく、一層努力する所存です。

村松憲君

公益財団法人日本テニス協会 功労賞 受賞

村松君は、公益財団法人日本テニス協会より、功労賞を受賞した。

同君は20年以上にわたり日本テニス協会において、医科学委員、スポーツ科学委員、競技者育成推進委員会・技術部会委員、強化本部ナショナルチームテクニカルサイエンスサポートテクニカル部会長、強化情報・科学委員会委員、コーチング委員会常任委員、アカデミー委員会委員等を務めた。

具体的活動として、日本代表チーム（デビ

スカップ、フェドカップ）に対する戦術分析サポート（2002年タイ戦、2005年台湾戦、2006年中国戦、2007年タイ戦、2007年ルーマニア戦など）、日本代表選手に対する体力測定・映像フィードバックサポート、ユニバーシアード代表選手に対する個別の戦術分析・映像分析サポート、テニス指導教本・プレーヤーズノートの執筆・編集、公認上級コーチ専門科目講習会等の講習会におけるバイオメカニクス講義、などを行った。



令和6年度 功労賞 受賞盾

清水花菜君

「服部真二スポーツ賞 Inspiring Coach」 受賞

「服部真二賞」は、セイコーグループの服部真二氏が設立した服部真二文化・スポーツ財団が、音楽やスポーツの分野において発展・改革に挑むリーダー、世界に向けて挑戦している若い人、そして彼らを心身両面から支え育成に努めているコーチ・エキスパートを応援し、さらなる活躍のための環境づくりを行うことを目的としている。

清水君は、第7回目「服部真二スポーツ賞 Inspiring Coach」を受賞した。授賞式は2024年11月1日、都内ホテルにて開催され、各分野で活躍する受賞者が一堂に会した。

現在、清水君は助教として教育・研究に従事する傍ら、公益財団法人日本体操協会 新体操強化本部員としてジュニア世代の育成・

強化に尽力している。特に、女性アスリートの育成・指導に関する研究と実践を融合させた取り組みが高く評価され、今回の受賞に至った。本受賞を励みに、今後もより良い指導や研究を通じて女性アスリートの支援と競技の発展に貢献していくことが期待される。

関連情報

- 一般社団法人 服部真二文化・スポーツ財団ホームページ
<https://www.hattorishinji-zaidan.or.jp/award.html>
- Press Release
https://www.hattorishinji-zaidan.or.jp/pdf/Pressrelease_20241101.pdf



(左) 清水花菜君 (右) 服部真二理事長



受賞トロフィー

Ⅱ．研究活動記録

(研究委員会)

1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成

須田 芳正 【教授】

学会発表等

- ・Fukushi, N., Tamura, T., Hasegawa, D., Suda, Y., “A Fundamental Study on GPS Data in College Futsal Lessons”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年 7 月.

研究助成等

- ・“ヨーロッパサッカーを醸成する文化を探る”, 学術振興資金 (共同), 500,000円.

石手 靖 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

- ・石手靖, “塾高バレー部インターハイ・中津・七五年”, 三田評論 (巻頭随筆, 丘の上), 慶應義塾: 4 頁, 2024年10月.

(報告書)

- ・石手靖, 清水花菜, “日吉陸上競技場リニューアル記念Enjoy Sports Day”, 慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第45号 (特集IV), 慶應義塾大学教養研究センター: 5 頁, 2024年11月29日.

学会発表等

- ・矢作拓也, 石手靖, “バレーボールにおけるスポーツの社会的な課題へのアプローチ—社会人クラブチームのバレーボール大会から—”, 日本体育・スポーツ・健康学会, 福岡大学, 2024年 8 月.
- ・矢作拓也, 石手靖, “バレーボールクラブチームの環境作りを通じた社会的課題へのアプローチ その2”, 日本バレーボール学会, 慶應義塾大学, 2025年 2 月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本バレーボール学会副会長
- ・日本バレーボール学会第30回記念大会実行委員長
- ・横浜ビーチバレーボール連盟理事

当年中の研究教育活動の概要

- ・2024年度永年勤続40年表彰 2024年11月 1 日

佐々木玲子 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・佐々木玲子, “子どもの運動の発達”, 新・保育シリーズ10 保育内容「健康」(分担; 第 5 章), 学術図書出版, p.62-76, 2025年

(論文)

- ・石沢順子, 大貫麻美, 椎橋げんき, 原口るみ, 奈良典子, 稲田結美, 佐々木玲子, 渡邊淳, “A Case Study on STEAM Education for Early Elementary Students: Development of Egg-Themed Learning Materials for Food and Nutrition Education”, 白百合女子大学 初等教育学科紀要, 第10号, 印刷中, 2025年.

(報告書等)

- ・“スポーツ少年団における多種多様なスポーツ・運動(遊び)を経験させる意義と実践”(パネリスト報告), Sport Japan, 11-12月号, 公益財団法人日本スポーツ協会, : 37-39, 2024年.

学会発表等

- ・Shimizu, K., Kanke, S., Sasaki, R., “Relation between motion characteristics and evaluation of split leap in rhythmic gymnastics”, The 29th European College of Sport Science, Glasgow, 2024.2-5

- Murayama, M., Nagata, N., Shimizu, K., Teraoka, E., Inami, T., Fukushi, N., Higashihara, A., Okuyama, S., Sasaki, R. “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, The 29th European College of Sport Science, Glasgow, 2024.2-5
- 佐々木玲子, “子どもの動きをどう“みる”か?” (シンポジウム2・指定討論者), 第23回日本発育発達学会, 奈良女子大学, 2025.3.15-16

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- 佐々木玲子, “ジュニア・ユース期において「できるようになる」, 「うまくなる」ことの大切さ”, 第7回ジュニアスポーツフォーラム (A分科会パネリスト), 東京; 紀尾井カンファレンス, 2024.6.16.

(講師)

- 佐々木玲子, “動きの発達”, 公益財団法人日本スポーツ協会令和6年度公認ジュニアスポーツ指導員養成講習会 (理論編), オンライン, 2024.8.3
- 佐々木玲子, “アクティブ・チャイルド・プログラム (ACP) 研修会～理論編～”, 公益財団法人日本スポーツ協会令和5年度アクティブ・チャイルド・プログラム (ACP) 研修会, 神奈川県, 2025.2.2

(役職)

- 日本学術会議連携会員
- 日本体育・スポーツ・健康学会理事 (～6月)
- 東京体育学会常任理事
- 日本バイオメカニクス学会監事
- 日本子ども学会理事
- 比較舞踊学会副会長
- 日本スポーツ協会スポーツ医・科学専門委員会委員
- 日本スポーツ少年団指導育成部会部会員
- 世田谷区スポーツ推進審議会委員 (～8月)
- 笹川スポーツ財団SSFスポーツライフ調査委員会委員
- 日本スポーツ・フォー・オール協議会理事
- 横浜市スポーツ協会理事
- 新宿未来創造財団理事

研究助成等

- “幼児の基本的運動スキルの発達特性～調整力の有効な評価法の開発に向けて”, 科学研究費助成金 基盤研究 (C), (22K02416).
- “幼少期から自らの健康を保持・増進できるコンピテンスを育むSTEAM教育の検討 (研究分担者: 研究代表者 石沢順子)”, 科学研究費助成金 基盤研究 (C) (20K03258).

当年中の研究教育活動の概要

本年度は、研究面では、基盤研究のテーマであるループリックを用いた授業評価研究を継続し、国際学会での発表、国内シンポジウムの開催に協力した。また、新体操の動作分析研究、STEAM教育研究、それぞれに共同研究者として参画し、国内外での学会発表を行った。教育面においては、講義「スポーツとジェンダー」の履修人数も増え、共同担当者とともに授業内容の更なる検討を重ね質の向上を目指した。

村山 光義 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- Yamaguchi M, Inami T, Ishida H, Nagata N, Murayama M, Morito A, Yamada S, Kohtake N, “Bioimpedance analysis for identifying new indicators of exercise-induced muscle damage” Scientific Reports, 14:15299, 2024

学会発表等

- ・村山光義, “運動誘発性筋損傷に対する光治療の効果”, 第35回日本レーザー治療学会, 東京, 日本レーザー治療学会誌, 21:71, 2024.6.22.
- ・Murayama M, Nagata N, Shimizu K, Teraoka E, Inami T, Fukushi N, Higashihara A, Okuyama S, Sasaki R, “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, 29th Annual congress of the European College of Sport Science, Glasgow, (England), Book of abstract, p842, 2024.7.2-5.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(ワークショップ)

- ・村山光義, 慶應義塾大学体育研究所・(公社) 全国大学体育連合関東支部共催ワークショップ『ループリック作成と活用を考えるワークショップ&ディスカッション』進行(慶應義塾大学体育研究所基盤研究3 班の活動として), 2024.11.9

研究助成等

- ・“交感神経活動が筋硬度に及ぼす影響”, 文部科学省科学研究費(基盤研究(C)) 課題番号19K11556, 延長

当年中の研究教育活動の概要

当年は、所内の基盤研究において、大学体育におけるループリックを活用した成績評価方法の活用について引き続き検討を進めた。具体的には、ヨーロッパスポーツ科学会議にてループリックに関する教員の認知度や期待度に対する調査結果についてポスター発表を行い、さらに、ループリックを学生と共有して行う授業における、教員の取り組みに関するアクションリサーチの推進、(公社) 全国大学体育連合関東支部との共催ワークショップ『ループリック作成と活用を考えるワークショップ&ディスカッション』を企画・開催した。また、(公社) 全国大学体育連合の将来構想委員長としてもオンライン意見交換会を企画し、大学体育の喫緊の課題整理とそのための改善施策に関する議論を進めることに力を注いだ。

加藤 大仁 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(分担執筆)

- ・日本体育・スポーツ政策学会『スポーツ政策学』(2025年9月刊行予定) *第1部理論編 第8章第2節「スポーツ議員連盟」を分担執筆。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・埼玉県バスケットボール協会裁定委員

当年中の研究教育活動の概要

スポーツ政策をめぐる政治過程をトレースすることにより、我が国の政治について考察することを第一目標としている。加えて、ロシアによるウクライナ侵攻の経緯と、ロシアに対する各種競技団体の対応などについて纏めるべく、資料を収集している。

村松 憲 【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・村松憲, “サーブのスピードと回転量について”, 横浜インターナショナルテニスコミュニティテクニカルセミナー, 2024年5月6日.
- ・村松憲, “機能解剖とバイオメカニクス”, 健康運動実践指導者養成講習会, 神奈川県横浜市, 2024年6月24日.

(役職)

- ・日本テニス学会運営委員
- ・日本スポーツパフォーマンス学会編集委員

山内 賢 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- Naoki Sakane, Ken Yamauchi, Ippei Kutsuna, Akiko Suganuma, Masayuki Domichi, Kei Hirano, hirano. Kengo Wada, Masashi Ishimaru, Mitsuharu Hosokawa, Yosuke Izawa, Yoshihiro Matsumura, matsumura. Junichi Hozumi, “Application of machine learning for detecting high fall risk in middle-aged workers using video-based analysis of the first 3 steps”, Journal: Journal of Occupational Health, Jan 7;67(1), 2025.

学会発表等

- 山内賢, 山内めい, 市河勉, 橋口普, 斉藤孝行, 宮平喬, 長谷川弘道, 荻田亮, 大林直樹, “ボールを用いるウォーキングによる「さん歩」後の歩容変化 ～事例報告～”, 第32回日本健康教育学会学術大会, 長野県長野県立大学, 令和6(2024)年7月6日(土)・7日(日).
- 山内賢, 橋口普, 市河勉, 宮平喬, 吉田弘法, 大林直樹, “三步で歩容を評価する新たな試み”, 第78回日本体力医学会大会, 佐賀大学(本庄キャンパス), 令和6(2024)年9月2日(月)～4日(水).
- 山内賢, 市河勉, 橋口普, 大林直樹, 吉田弘法, 長谷川弘道, 荻田亮, 斉藤孝行, “インソール装着で高齢者の歩容が変化した事例報告: 装着と脱着後に着目”, 第83回日本公衆衛生学会総会, 札幌コンベンションセンター, 札幌市産業振興センター, 令和6(2024)年10月29日(火)～31日(木).
- 山内賢, 市河勉, 吉田弘法, 橋口晋, 長谷川弘道, 大林直樹, “にほんの歩行専用ボールを用いるフィットネスウォーキングは認知能力を改善するのか?”, 第28回日本ウォーキング学会びわ湖大会, 滋賀県立県民交流センター ピアザ淡海 & びわこ成蹊スポーツ大学, 令和6(2024)年10月19日(土)・20日(日).
- 忽那一平, 同道正行, 坂根直樹, 山内賢, 平野景, 和田健吾, 石丸雅司, 穂積潤一, 細川満春, 井澤洋介, 松村吉浩, “動画と機械学習を用いた転倒リスク評価システムの開発と働き盛り世代への実装: Video-based Gait Analysis Study”, 第97回日本産業衛生学会, 広島国際会議場・中国新聞ビル, 令和6(2024)年5月22日(水)～25日(土).
- Ken Yamauchi, Susumu Hashiguchi, Mei Yamauchi, Tsutomu Ichikawa, Hironori Yoshida, Takashi Miyahira, Hiromichi Hasegawa, Naoki Obayashi, “Gait Analysis Using a Drone: A Case Study”, 57th Australian Association of Gerontology (AAG) Conference, Hobart Tasmania Australia, 12-15 November 2024.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- 山内賢, “「歩行」についての測定と健康教室”, ボールを用いるウォーキングは歩行能力の維持・改善に貢献するのか?! ～その体感(指導)と歩容変化の実際～, 千葉県船橋市 ルネアクシウム カンファレンススペース, 2024年8月23日(金) 12:30～16:30.

当年中の研究教育活動の概要

●研究について:

歩行能力、特に速度は健康寿命と相関があることが判明している。歩行速度が速い人ほど長寿で認知症や糖尿病、心臓疾患などの大病に罹りにくい、そしてQOLも高いという研究報告もある。また歩行速度低下の要因のひとつに、座位時間延伸による不活性が考えられている。我々が新型コロナウイルス感染症(COVID-19)を経験して、2類時期の緊急事態宣言時に広まった「stay home」、「おうち時間」のスローガンは、生活スタイルや公衆衛生に多くの影響を及ぼした。確かにオンライン普及によるテレワーク、オンライン教育等からわかる実態は、ICTやDXの概念理解や利便性が情報の新たな創造的価値を生み出しながら、コロナ禍であるからゆえ躍進したのであろう。この点は情報伝達やデータ処理・分析の効率化が躍進する善の獲得である。しかし一方で座位時間は増加して、「運動不足」を招いた結果を見逃せない。「運動不足のへ問題視や課題」は、コロナ禍以前からWHOの指摘により、一定の気づきがあるが、この期を境に健康寿命を延ばすために必要な個人の健康リテラシーやセルフメディケーション能力高揚の可能性がさらに増大したと専門家の指摘がある。まさにピンチがチャンスに代わり、健康意識への気持ちを切り替える意味で、COVID-19が5類に変わった現在はもう一度、健康に関する方策を練り直す時期と考える。1日の中で少し

でも活動量を増やす行為（移動や行動の実際）は、最も身近で容易に実行可能なウォーキングであり、健康関連体力の維持改善に直結する命の泉である。言うまでもなく一日の時間は平等であるが故、運動不足解消に、何らかの工夫「健康に関するウォーキングマネジメント」が必要であると予見する。従ってスマートな歩行の思考としては、ただ歩くだけ（量）にとどまらない、どのような歩容で歩いたか（質）を認識しながら効果を求めるウォーキングチップスの開発研究を進めている。本年度の成果は、未だ開発途中であるが、第一段階の姿勢推定技術（骨格情報）導入による、歩容解析システムを試作した。

※姿勢推定とは、ヒトの関節や特徴点を座標データで検出する技術である。

●教育について：

DXをスポーツや教育分野に導入する価値は、指導者と学習者双方に気づきが生まれて、アクティブに創意工夫する学びへ発展するロジックを最大限に発生させる事象の積み重ねによるコミュニケーションやコーチングの条件づくりや、必要であれば適切なツールを活用する発想と実行にあると考えられる。動作の技術・技能ポイントをインタラクティブする際に必要となる観察能力は、個々が感じる暗黙知に加え、映像から得られる視覚情報確認、効果を数量化して解析する分析能力強化等、活動にサイエンスを導入する教育の展開で強化される。従って授業では口述指導だけでなく映像を用いる指導様式を取り入れている。体育の教育・指導現場において、単に口述や感覚知だけでなく、視聴覚的指導とデジタイゼーションによる認知を加えれば、身体知教育の効果は高まり、身体活動の楽しさや目標達成志向の追求も強化されと考えている。このような動作解析の開発研究と教育を融合する工夫にチャレンジ中である。授業で展開している具体例は、ハンドボールの授業がゲーム観察にドローン映像を導入、ウォーキングの授業が映像による歩容分析の介入、フィットネストレーニングに遅延映像によるフォームチェック等である。

●今後の展開（言うだけでは何も生まれない！説得よりも納得の授業を目指す）：

研究で開発しているフィードバックシステムを教育現場で活用していきたい。歩容に関しては、これまで定点カメラ撮影だけに頼る歩容解析に留めていたが、現在2Dの姿勢推定技術を用いて骨格情報をエフェクトする運動動作の数量化が可能な教材開発に成功した特化事例がある。この事例を他の種目にも流用したいが、今のところウォーキング程度の分析でしか使用できていない。その理由は、本教材にあるカメラの性能とPCの処理能力の壁である。ただしこの性能を上げれば、多彩な動作観察や学習・指導の教育強化（エビデンスにもとづいたわかりやすい指導）にも応用できると考えられる。

野口 和行【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（著書・分担執筆）

- ・野口和行，“ノルウェーとアメリカの野外教育-比較文化論的考察”，土方圭，張本文昭，“野外教育学の探求-実践の礎となる理論をめぐる14章”，杏林書院，pp167-171，2024年7月。

（翻訳）

- ・野口和行，“野外における体験型ファシリテーション”，ネヴィン・J.ハーパー，ウィル・W.ドブド，“アウトドアセラピーズ-実践入門 その可能性とまなざし”，晃洋書房，pp21-36，2025年3月。
- ・野口和行，“アウトドアプログラムにおけるサイコロジカル・ファーストエイド”，ネヴィン・J.ハーパー，ウィル・W.ドブド，“アウトドアセラピーズ-実践入門 その可能性とまなざし”，晃洋書房，pp51-65，2025年3月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）

- ・日本野外教育学会副理事長
- ・日本水上スポーツ学会専務理事
- ・（公社）日本キャンプ協会常務理事
- ・大学スケート研究会理事
- ・ジャパンアウトドアリーダーズアワード 運営委員 選考委員
- ・文部科学省 令和6年度「青少年の体験活動推進企業表彰」審査委員

- ・文部科学省 令和6年度「総合政策局の体験活動関連事業に係る技術審査委員会」委員
- ・文部科学省 「国立青少年教育施設の振興方策に関する検討会」副座長

当年中の研究教育活動の概要

特別な支援を必要とする人たちを対象とした自然体験活動の教育的効果と課題について、引き続き研究と実践を行っている。セラピーとしての野外活動に関する共同研究を進めており、訳書を出版した。また、文部科学省の国立青少年施設の振興方策に関する検討会において副座長を務め、これからの青少年施設のあり方について検討を行っている。

吉田 泰将 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Chida, K., Inami, T., Yamaguchi, S., Yoshida, Y., Kohtake, N., “Effects of different target distances on the kinematics of hip, knee, and ankle joints in the fencing lunge”, Biomechanics, 4:309-318, 2024.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・吉田泰将他, “全日本剣道連盟後援講習会”, 指導法担当, 長崎県諫早市長崎日本大学高等学校, 2024年9月.
- ・吉田泰将他, “令和6年度新潟県(上越市)地域社会剣道指導者研修会” 指導法担当, 謙信公武道館(新潟県立武道館), 2024年12月.

(審判員)

- ・第78回国民スポーツ大会・剣道競技(佐賀県神埼市), 2024年9月.

(審判長)

- ・東京都学生剣道選手権大会(男・女), 2024年5月.
- ・関東学生剣道選手権大会(男・女), 2024年5月.
- ・関東学生剣道優勝大会(男・女), 2024年9月.
- ・関東学生剣道新人戦大会(男・女) 2024年11月.

(副審判長)

- ・全日本学生剣道選手権大会・東西対抗戦(男・女) 2024年6月.
- ・全日本少年少女剣道錬成大会, 日本武道館, 2024年7月.

(審判主任)

- ・全日本道府県対抗女子剣道優勝大会, 日本武道館, 2024年7月.
- ・全日本学生剣道優勝大会(男・女) 2024年10月・11月.

(役職)

- ・公益財団法人全日本剣道連盟 理事(全日本学校剣道連盟推薦) 通年
- ・公益財団法人全日本剣道連盟 普及委員会学校教育部会・委員 通年
- ・公益財団法人全日本剣道連盟 社会体育指導員養成講習会 講師 通年
- ・スポーツ庁令和6年度「令和の日本型学校体育構築支援事業」支援強化委員会 委員・通年
- ・一般財団法人全日本学校剣道連盟 常任理事・事務局長 通年
- ・全日本学連剣友会 会長推薦理事 通年
- ・関東学連剣友連合会 副会長 通年
- ・東京学連剣友連合会 監事 通年
- ・慶應義塾体育会剣道部 師範(三田剣友会・副師範) 通年
- ・慶應義塾大学医学部体育会剣道部 師範代行 通年

(資格)

- ・一般財団法人全日本剣道連盟 剣道教士八段
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 審判講師養成指導講師認定

研究助成等

- ・“剣道におけるパフォーマンス系基礎データの構築（共同研究者）”，福澤研究基金.

当年中の研究教育活動の概要

剣道においてパフォーマンスを構成する要素の身体組成データである体脂肪率ならびにFFMIと練習時間や剣道歴との間の関係について、體育會剣道部の継続的なデータの収集を行った。具体的には、男性106名、女性36名を測定し、稽古・体力トレーニング・メンタルトレーニングの結果を、競技成績に結び付けるべく指導している。

加藤 幸司 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・加藤幸司, 平野泰宏, “パラバドミントン車椅子カテゴリー WH2の競技分析—男子シングルス及び女子シングルス—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第64巻; 1-6, 2024.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本バドミントン学会監事

研究助成等

- ・“パラバドミントン車椅子カテゴリーの競技特性に関する研究”，慶應義塾大学体育研究所所内研究費（研究代表者），555,500円.

当年中の研究教育活動の概要

教育活動においてはバドミントンという歴史的に生きている材料を使いながら、どのように物を考え捉えるかを教授することに腐心した。研究活動においては、パリオリンピック後、バドミントン界の世代交代が進む中で新たに台頭しつつある選手の出場試合に関連するデータを収集し、ピリオダイゼーション理論をベースにして検討を進めている。パラバドミントンに関しては、車椅子カテゴリーWH2の試合データを収集・分析し論文化した。今後はWH1と立位カテゴリーの試合分析を進めていく予定である。

坂井 利彰 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

坂井利彰, “新星・坂本怜の強さに迫る”, スマッシュ 4月号, 日本スポーツ企画出版社, 2025年

坂井利彰, “新星・坂本怜の強さに迫る”, スマッシュ 5月号, 日本スポーツ企画出版社, 2025年

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団・こどもの体力・基礎運動能力向上事業・世田谷区ジュニアアカデミー（テニス）総合監修

(解説)

- ・日本放送協会『ウィンブルドン2024』, 2024年7月

(役職)

- ・慶應義塾体育会庭球部部長
- ・横浜慶應チャレンジャー国際テニストーナメント・大会副実行委員長
- ・公益財団法人日本テニス協会 常務理事（大会事業本部本部長・強化育成本部副本部長）
- ・日清食品有限公司 社外取締役

当年中の研究教育活動の概要

- ・庭球部学生のおックスフォード遠征・ウィンブルドン視察への帯同, 2024年7月

奥山 静代 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

- ・奥山静代 “ココロとからだを整える” 2024年度塾生案内. 慶應義塾大学：p59, 2024.

学会発表等

- ・Murayama M, Nagata N, Shimizu K, Teraoka E, Inami T, Fukushi N, Higashihara A, Okuyama S, Sasaki R, “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, 29th Annual congress of the European College of Sport Science, Glasgow, (England), 2024.7.2-5.

※2023年度塾派遣留学にて現在アメリカに留学中.

鳥海 崇 【准教授】

研究助成等

- ・“学校における水難事故防止対策の強化”，令和6年度令和の日本型学校体育構築支援事業，180万円.

当年中の研究教育活動の概要

研究活動：国内各地の水難事故現場を視察し，事故防止に必要な知識・技術・態度についての知見を深めた.

教育活動：体育会副理事として，2024年5月に全塾協議会を脱退し，体育会支援組織に加入した体育会本部の部長に就任した.

永田 直也 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

- ・Yamaguchi, S., Inami, T., Ishida, H., Morito, A., Yamada, S., Nagata, N., Murayama, M., “The Effect of 28 Days of creatine prior intake on accelerated recovery from exercise-induced muscle damage: A double-blind, randomized, placebo-controlled trial”, *Nutrients*, 16:896, 2024.
- ・Yamaguchi M, Inami T, Ishida H, Nagata N, Murayama M, Morito A, Yamada S, Kohtake N, “Bioimpedance analysis for identifying new indicators of exercise-induced muscle damage” *Scientific Reports*, 14:15299, 2024

学会発表等

- ・Murayama M, Nagata N, Shimizu K, Teraoka E, Inami T, Fukushi N, Higashihara A, Okuyama S, Sasaki R, “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, 29th Annual congress of the European College of Sport Science, Glasgow, (England), 2024.7.2-5.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(フィールドワーク)

- ・公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会 強化本部情報科学部会 部会員.

当年中の研究教育活動の概要

本年は、塾派遣留学の1年目として、アメリカ合衆国のカンザス大学を訪問している。訪問先のスポーツ・運動心理学研究室は、大学内のみならず社会に対してもスポーツ心理学的知見を提供している。私は、週1回修士課程の授業と研究室ミーティングに出席し、指導教員と学生・学生間の議論を聞いている。次年度も引き続き滞在できる機会をいただけているので、2年間の滞在を様々なところで返還できるよう、研究および実践の経験を多く積んでいきたい。

福士 徳文 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

- ・福士徳文, “U-20全日本大学選抜 アジア大学サッカートーナメント (Asian University Football Tournament 2024 Malaysia)”, JFA Technical News Vol.123:75-77, 2024.

学会発表等

- ・Fukushi, N., Tamura, T., Hasegawa, D., Suda, Y., “A Fundamental Study on GPS Data in College Futsal Lessons”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年 7 月.
- ・Murayama, M., Nagata, N., Shimizu, K., Teraoka, E., Inami, T., Fukushi, N., Higashihara, A., Sasaki, R., “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年 7 月.
- ・Tamura, T., Namiki, N., Fukushi, N., “Elucidation of Game Analysis Process in Soccer”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年 7 月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・慶應義塾体育会副理事
- ・慶應義塾体育会アドバイザー
- ・関東大学サッカー連盟技術委員
- ・CPサッカー男子日本代表強化スタッフ (コーチ)
- ・公益社団法人全国大学体育連合総務部委員

(その他)

- ・アジア大学サッカートーナメント (Asian University Football Tournament 2024 Malaysia) ・U-20全日本大学選抜監督, マレーシア・クアラルンプール, 2024年 6 月 1 日～ 9 日.
- ・2024 IFCPF WORLD CUP ・CPサッカー男子日本代表コーチ, スペイン・サラウ, 2024年11月 5 日～24日.
- ・第39回デンソーカップチャレンジサッカー静岡大会 ・U-20全日本大学選抜監督, 静岡県時之栖スポーツセンター, 2025年 2 月26日～ 3 月 2 日.

研究助成等

- ・“ヨーロッパサッカーを醸成する文化を探る”(共同研究者: 研究代表者 須田芳正), 学事振興資金 (共同研究), 500,000円

当年中の研究教育活動の概要

当年も、予てからのテーマであるサッカー選手の競技力向上に関する研究の推進に努めた。今年度は、サッカー全日本大学選抜の監督を務める機会に恵まれ、国内外の大会に帯同した。競技スポーツの現場の中で、「全日本」を背負う覚悟やプレッシャーを含めたその体験は、何事にも代え難い貴重な財産となった。また、CPサッカー男子日本代表の活動においては、ワールドカップにコーチとして帯同し、各国のワールドカップに懸ける想いを随所に感じ、改めてサッカー競技におけるワールドカップの偉大さを痛感した。これらの学びや体験を、今後の研究教育活動にさらに還元していきたい。

稲見 崇孝 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・広瀬統一, 泉重樹, 福田崇, 稲見崇孝 (編著), “ケガをしないカラダづくり (第2版 重版)”, 東洋館出版, 2023.

(論文)

- ・Inami, T., Yamaguchi, S., Kim, H.K., Miyagawa, H., Murayama, M., “Relationship between changes in muscle stiffness after a comfortable massage and the massage pressure”, Journal of Bodywork and Movement Therapies, 39:350-355, 2024.

- Yamaguchi, S., Inami, T., Ishida, H., Morito, A., Yamada, S., Nagata, N., Murayama, M., “The Effect of 28 Days of creatine prior intake on accelerated recovery from exercise-induced muscle damage: A double-blind, randomized, placebo-controlled trial”, *Nutrients*, 16:896, 2024.
- Chida, K., Inami, T., Yamaguchi, S., Yoshida, Y., Kohtake, N., “Effects of different target distances on the kinematics of hip, knee, and ankle joints in the fencing lunge”, *Biomechanics*, 4:309–318, 2024.
- Yamaguchi, S., Inami, T., Ishida, H., Nagata, N., Murayama, M., Morito, A., Yamada, S., Kohtake, N., “Bioimpedance analysis for identifying new indicators of exercise-induced muscle damage”, *Scientific Reports*, 14:15299, 2024.
- Nishioka, T., Yamaguchi, S., Inami, T., “Flight time method modified: Development of a novel and more accurate method for measuring vertical jump height using a smartphone application”, *International Journal of Sports Physiology and Performance*, 20:56–64, 2024.
- Katsura, Y., Takeda, N., Inami, T., Yamaguchi, S., Takahashi, S., Nakamura, M., Nosaka, K., “Effects of lunges inserted in walking on lower limb muscle strength, physical and cognitive function of regular walkers”, *European Journal of Applied Physiology*, 124:2343–2352, 2024.

(その他)

- 三田評論「アスリートとともに考えるサイエンスのちから」2024年7月
- スポーツ栄養web「クレアチン摂取で筋損傷の回復が有意に促進、試合が続く時の対策に有望か プラセボ対照RCT」2024年5月, <https://sndj-web.jp/news/002792.php>

学会発表等

- 西岡卓哉, 山口翔大, 羽島大貴, 稲見崇孝, “簡便かつより高精度な跳躍高測定法を用いたカー速度プロファイリング”, NSCAカンファレンス(大阪府), 2024年12月.
- 山口翔大, 桂良寛, 稲見崇孝, “サルコペニアの早期診断における新たな生化学マーカーの検証: 尿中タウチンフラグメントに着目して”, 第78回日本体力医学会大会(佐賀県), 2024年9月.
- 桂良寛, 武田典子, 稲見崇孝, 山口翔大, 高橋将, 中村雅俊, 野坂和則, “自重レジスタンストレーニングに伴う身体機能の変化は伸張性筋活動で生じる”, 第78回日本体力医学会大会(佐賀県), 2024年9月.
- Murayama, M., Nagata, N., Shimizu, K., Teraoka, E., Inami, T., Fukushi, N., Higashihara, A., Okuyama, S., Sasaki, R. “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, *European College of Sport Science, Glasgow*, 2024年7月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- 岐阜県立大垣工業高等学校「キャリア教育」(岐阜県) 2025年1月
- 埼玉スポーツ医科学フォーラム「夏の甲子園12試合を勝ち抜くスポーツ科学の力 慶應義塾高校野球部の事例」(埼玉県) 2024年5月
- 慶應義塾大学整形外科科学教室 整形外科バイオメカニクス研究会「スポーツフィールドでのパフォーマンス計測とトレーニング運用 研究との循環と社会実装」(東京都) 2024年5月

(フィールドワーク等の研究教育活動)

- 大学院健康マネジメント研究科研究科委員
- 体育研究所スポーツサイエンスラボ
- 慶應スポーツSDGsシンポジウム2025スポーツが創る持続可能な社会 セッション2「インクルーシブスポーツ ～誰一人取り残さないスポーツ～」モデレータ(神奈川県) 2025年3月
- 協生環境推進室主催協生環境推進week「ゴルフと人生 プロゴルファー中嶋常幸氏」ファシリテーター(東京都) 2025年1月
- 第78回日本体力医学会大会 教育講演7「君たちはどう研究するか」座長(佐賀県) 2024年9月
- アスリートサポート: 陸上競技 山縣亮太選手、豊田謙選手(セイコーグループ株式会社所属)
水泳飛込競技 日本代表 坂井丞選手(株式会社ミキハウス所属)
女子プロゴルファー 蛭田みな美選手(ユアサ商事株式会社)
スカッシュ日本代表選手(株式会社ティップネス)

(役職)

- ・ Keio Global Research Institute (KGRI) 慶應スポーツSDGsセンター 副センター長

(論文査読)

- ・ Journal of Sports Medicine and Physical Fitness (Italy)

研究助成等

- ・ “局所生体インピーダンス計測による運動誘発性筋損傷評価の提案（研究代表者）”，科学研究費助成金 基盤研究 (C).
- ・ “体重を利用した新しいエキセントリックトレーニングが高齢者の身体機能に及ぼす影響（研究分担者）”，科学研究費助成金 基盤研究 (C).
- ・ “剣道におけるパフォーマンス系基礎データの構築（共同研究者）”，福澤研究基金.
- ・ 他、企業共同研究 7 件

当年中の研究教育活動の概要

准教授 1 年目として、二つの新しい取り組みがスタートした。一つ目は大学院健康マネジメント研究科の研究科委員となったことである。スポーツサイエンスの研究室を構え、大学院生の受け入れが始まり、2024 年度は修士課程 3 名、博士課程 1 名の合計 4 名を受け入れている。大学院生に加え、これまでも在籍していた特任教員 2 名・研究員 2 名、さらに 4 年目となるスポーツサイエンスラボの学部生 12 名を加え、研究室としては合計 21 名となった。二つ目は、昨年度から加速させている組織横断的な取り組みである。スポーツ医学研究センターとは、日吉スポーツ医科学ミーティングや KGRI 慶應スポーツSDGsセンター(副センター長)を継続しているが、当該年度は新たに三田協生環境推進室と協生環境推進 week としてプロゴルファーの中嶋常幸氏と対談イベントをご一緒させていただいた。

東原 綾子 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・ Yasuharu Nagano, Shogo Sasaki, Ayako Higashihara, Takashi Oyama. “Early sports specialization in Japanese young soccer players and related factors” Plos One, 19(8):e0302339, 2024.

(執筆)

- ・ 東原綾子，“Researcher’s Eye：スポーツ医科学研究の祭典”，三田評論，慶應義塾：No. 1287, p.84, 2024年 4 月.

学会発表等

- ・ Ayako Higashihara, Genki Futatsubashi, Kento Nakagawa, Hirofumi Sekiguchi. “Recruitment Properties of Corticospinal Excitability and Cortical Inhibition of the Hamstring Muscles in Sprinters” Annual Meeting of American College of Sports Medicine. 28th-31th May 2024, Boston, USA.
- ・ Mitsuyoshi Murayama, Naoya Nagata, Kana Shimizu, Eishin Teraoka, Takayuki Inami, Norifumi Fukushi, Ayako Higashihara, Shizuyo Okuyama, Reiko Sasaki. “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, European College of Sport Science, 3rd-6th July 2024, Glasgow, England.
- ・ 東原綾子，二橋元紀，中川剣人，関口浩文，永野康治. “ハムストリングス肉離れ既往脚における皮質脊髄路動員特性の分析”，第78回日本体力医学会大会，佐賀，2024年 9 月.
- ・ 小野高志，東原綾子，Jurdan Mendiguchia，峯田晋史郎，小笠博義. “片側ハムストリングス肉離れ既往者における片脚デッドリフト時のキネマティクスおよびキネティクスに見られた健患差”，第35回日本臨床スポーツ医学会学術集会，新潟，2024年11月
- ・ 永野康治，須甲理生，東原綾子，大山高. “中学生スポーツ実施者におけるスポーツ専門化状況および急性外傷・慢性障害要因の検討”，第11回日本スポーツ理学療法学会，2025年 1 月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・東原綾子, “ハムストリングス肉離れ研究の現在地”, 日本体力医学会大会企画シンポジウム「ハムストリングス肉ばなれの克服・予防に必要な体力・技術に関する研究と取り組み」, 第78回日本体力医学会大会, 佐賀, 2024年9月2-4日.
- ・東原綾子, “研究知見を基に考えるハムストリングス肉離れ予防戦略” 日本スポーツ整形外科学会2024ワークショップセミナー (日本アスレティックトレーニング学会共催), 東京, 2024年9月12-13日
- ・東原綾子, “ループリックを活用した授業実践報告～チームスポーツを通じた社会情動的スキル向上を目指して～”, 慶應義塾大学体育研究所・(公社) 全国大学体育連合関東支部共催ワークショップ「ループリックを活用した実技・実習系授業の充実を考える」, 神奈川, 2024年11月6日.
- ・Ayako Higashihara, “Hamstring Activation During Sprinting and Influence of the Previous Injury on Function of the Hamstring Muscles”. Symphonist and panelist in Aspetar International Rehabilitation Conference – The Complete Guide to Thigh Muscle Injuries. SESSION 5: Biomechanics. 16th-17th November 2024, Doha, Qatar.
- ・東原綾子, “ハムストリングス肉離れに関する研究レビュー”, 第23回コンディショニング科学カンファレンス「ハムストリングス肉離れの予防を科学する」, 東京, 2025年2月24日.

(役職)

- ・慶應義塾體育會副理事
- ・国立スポーツ科学センター令和6年度スポーツ医・科学研究事業 研究協力者
- ・日本トレーニング科学会機関誌 Journal of Training Science for Exercise and Sport (トレーニング科学) 編集委員
- ・公益社団法人全国大学体育連合 将来構想委員会 委員

(フィールドワーク)

- ・Associate Editor for Women in Sport, Frontiers in Sports and Active Living
- ・論文査読 (Sports Medicine, Sports Biomechanics, Plos One, 日本アスレティックトレーニング学会誌 ほか7件)

研究助成等

- ・“神経生理学的アプローチによるハムストリングス肉離れ受傷リスク要因の解明”, 科学研究費補助金基盤(C), (研究代表者), 2100千円
- ・“マルチスポーツ活動によるスポーツ障害予防効果および身体機能変化の検証”, 科学研究費補助金分担金(研究分担者), 210千円
- ・“大学女子学生の月経とコンディショニングに関する知識・意識調査と講習会の有用性検討”(研究代表者), 慶應義塾学事振興資金個人研究, 300千円.
- ・“大腿部における皮質脊髄路興奮性評価法の妥当性検討”, 慶應義塾大学体育研究所所内研究費(研究代表者), 289千円

当年中の研究教育活動の概要

本年4月より慶應義塾體育會副理事を拝命した。體育會における活動は重要な教育の一環であり、伝統を継承し「応援される勝者」を目指す塾體育會に貢献できるよう精進したい。また、教育活動では、新たにシーズンスポーツ(スキー)のスタッフとして参画させていただく機会を得て、70年以上にわたる伝統的な教育を継承していくことの意義を体感することができた。今後は実技指導にも貢献できるよう取り組んでいきたい。

研究活動では、本塾でスポーツ活動を行っている女子学生に対し、月経とコンディショニングに関する知識・意識調査を行うとともに、コンディショニングに関する講習会を実施した。今後も引き続き女子学生アスリートへの支援を継続していく。また、本年は国内外でスポーツ外傷予防研究に関する講演の機会を多く頂戴し、これまで蓄積してきた研究成果について多くのスポーツ実践現場の識者と意見を交わすことができた。今後もスポーツ現場における課題解決を目指し、研究を推進していきたい。

清水 花菜 【助教】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・清水花菜, 星川佳広, 橋爪みすず, “大学女子新体操選手（個人競技）に対するセッション RPE法を用いた試合に向けたトレーニング負荷管理”, 日本女子体育大学トレーニングセンター紀要, 28:9-16, 2024.

(報告書)

- ・石手靖, 清水花菜, “日吉陸上競技場リニューアル記念 Enjoy Sports Day”, 慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第45号 (特集IV), 慶應義塾大学教養研究センター: 5 頁, 2024年11月29日.

学会発表等

- ・Kana Shimizu, Sayuri Kanke, Reiko Sasaki, “Relation between motion characteristics and evaluation of split leap in rhythmic gymnastics”, 29th Annual congress of the European College of Sport Science, Glasgow (England), 2024.7.2-5.
- ・Murayama M, Nagata N, Shimizu K, Teraoka E, Inami T, Fukushi N, Higashihara A, Okuyama S, Sasaki R, “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, 29th Annual congress of the European College of Sport Science, Glasgow (England), 2024.7.2-5.
- ・柴山瑠莉子, 橋爪みすず, 清水花菜, 永野康治, “大学女子新体操選手における股関節筋力・柔軟性とコンディショニング不良との関連について”, 第13回日本アスレティックトレーニング学会学術大会, 2024年9月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・公益財団法人日本体操協会パリオリンピック強化本部 新体操強化本部長

(講師)

- ・清水花菜, “学生相談室グループアワー ボールを使った「コンディショニング」エクササイズ”, 慶應義塾大学日吉記念館多目的スタジオ, 2024年6月24日.
- ・清水花菜, 田中琴乃, “慶應義塾大学体育研究所2024公開講座 音楽に合わせて♪キッズ新体操体験会”, 慶應義塾大学日吉記念館多目的スタジオ, 2024年7月27日・8月3日.
- ・清水花菜他, “2024新体操女子9ブロックU-12研修会”, 中国ブロック: 広島県エフピコアリーナふくやま, 2024年10月19日.

(その他)

- ・服部真二スポーツ賞 Inspiring Coach 受賞, 2024年11月1日.
- ・第77回全日本新体操選手権大会 審判員, 高崎アリーナ, 2024年11月8日-10日.
- ・FIG Symposium for Rhythmic Gymnastics Coaches, Paris (France), 2025年1月24日-26日.
- ・2025新体操国際大会派遣選手選考会 審判員, NTC (味の素ナショナルトレーニングセンター), 2025年3月17日.
- ・2025 Internatinal Judges’ Course, Xi’an (CHN), 2025年3月23日-28日. 国際審判「カテゴリー3」取得.

研究助成等

- ・“新体操女子選手を対象としたコントロールテストおよびコンディショニング評価の検討”, 慶應義塾大学体育研究所所内研究費, 429,090円.
- ・潮田基金 (国外出張・渡航費補助), 250,000円.

当年中の研究教育活動の概要

今年度は、HAPP主催の日吉陸上競技場リニューアル記念行事や、地域の子どもの対象とした公開講座を開催し、スポーツ振興を通じた地域社会との繋がりの大切さを改めて実感した。また、11月には“服部真二スポーツ賞”という名誉ある賞を受賞し、多くの方々の支えに感謝するとともに、教育・指導の場でより一層貢献したいという思いを新たにした。

研究活動では、昨年取得したデータをもとに、sRPE法を用いたトレーニング負荷管理に関する研究を紀要にまとめた。その結果、体重管理や女性特有の月経を含めた負荷管理における課題が浮き彫りとなり、アスリートの健康維持とパフォーマンス向上の両立に向けた課題が明確になった。次年度は、女性アスリートのハイパフォーマンスとウェルビーイングをテーマに、小学生から引退後の元アスリートまでを対象に研究を進める。特に、長期的な健康とパフォーマンスのバランスに焦点を当て、現場で活用できるな知見を積み重ねていきたい。

梅本 雅之 【助教】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・梅本雅之，“キックスタートにおける台上動作の違いがスタートパフォーマンスに与える影響 ～競技レベル別の比較～”，慶應義塾大学体育研究所紀要，2024年度に掲載予定

学会発表等

- ・Umemoto, M., Fujito, Y., Hyodo, H., Furuta, N., Wada, T., Funato, K., “Changes in the characteristics of lower front leg in kick start of swimming race at different back plate positionings”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年7月.

研究助成等

- ・“競泳キックスタートの動作分析—日本代表選手の特徴—”，浅野均一記念奨励金，300,000円
- ・“競泳競技における汗乳酸が競技パフォーマンスに与える影響に関する実験的研究”，学事振興資金，（個人研究），500,000円

当年中の研究教育活動の概要

教育活動では、新たにセーリングを担当し、冬はスケート授業に帯同した。研究活動では、競泳における競技力向上に関する研究の推進に努めた。今後も学会発表や論文投稿に向けて取り組んでいきたい。また、今年度は多くの方にご支援をいただき、心より感謝申し上げます。来年度も引き続きご指導、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2. 所内定例研究会発表報告

第1回 5月14日

梅本 雅之

競泳キックスタートにおけるバックプレート の位置の違いがスタートパフォーマンスに与 える影響

【背景】競泳競技はスタート、ストローク、ターン、フィニッシュ局面の4つで構成されている。スタート局面でついたタイム差は最終的なタイム差より大きいことが報告されており、スタート局面の重要性が知られている。近年におけるスタート局面の研究では、バックプレート位置の違いによるスタートパフォーマンスの違いや、キネティクス解析が行われているが、台上動作に着目した研究が少ない。そのため、現場指導におけるバックプレート位置の適切な指導方法などが未だにない。そこで本研究会では、バックプレート位置の違いによる、スタートから脚離れ時までの下肢各関節角度変化が、5m、10m通過タイムに与える影響について明らかにする。

【目的】バックプレートの位置の違いによる、スタートから脚離れ時までの下肢各関節角度変化が、5m、10m通過タイムの通過時間に与える影響を明らかにする。

【方法】参加者は男子選手を対象とした。試技は15mまでとし、バックプレート位置を3段階に変化させ、合計3試技を行った。陸上にモーションキャプチャーシステムを10台とデジタルビデオカメラ2台を用いて、スタート合図から入水までの運動学データを取得した。

【結果及び考察】バックプレート位置が広くなるにつれて、10mタイムが速くなることを示した。その要因として跳び出し角度に有意に小さい値を示したことから、より水平に近い角度で跳び出すことで、10mタイムが速くなったことを示した。台上動作では、バックプレート位置が広くなるにつれて、スタート

構え時の股関節角度が大きい値を示し、後ろ足各関節角度の伸展開始のタイミングが早いことから、泳者は上体を起こすのに十分な時間が生まれ、跳び出し角度が水平に近い値となったのではないかと推察された。

第2回 6月11日

清水 花菜

新体操競技におけるコントロールテストの検討 ～バランス能力とコンディション評価～

【目的】大会で最高のパフォーマンスを発揮するためには、選手の日々のパフォーマンスやコンディションを適切に評価することが重要である。しかし、新体操におけるトレーニング負荷のモニタリングは不十分であり、選手のコンディショニング管理は主にコーチの主観に依存している (Debien. et al. 2022)。一方、先行研究では、心拍数やRPE（主観的運動強度）はコンディションに与える影響が重要な指標とされている (María et al. 2018, Douda et al. 2006)。よりコントロールテストの妥当性を高めるためには、テスト結果の推移に加え、選手のコンディション状況も同時に評価することが必要である。本研究では、身体難度に必要なバランス能力 (Massion, 1994) を評価するバランステストの妥当性を検証し、選手や指導者が大会に向けてのコンディションを把握できる客観的な評価方法について検討した。

【方法】大学新体操選手7名 (19.5 ± 1.2 yrs, BMI 18.8 ± 0.9) を対象とし、大会の4カ月前から3週に1回の割合で計6回のバランステストを行った。Barbara (2019) を参考に3種類のバランス動作（パッセ・横開脚・パンシェ）を選定し、重心動揺計（フットビューSAM）を用いて各2秒間実施した。静止した1秒間（30フレーム）の足圧中心軌跡について移動距離を測定し、最小移動距離を100%としてパフォーマンス率を示した。同時に、コンディション管理アプリ（Atleta）

を用いて、練習時間、RPE、および Session-RPE (Foster, 1998) を記録し、大会までの心身のコンディション変動を調査した。

【結果】 内的トレーニング負荷 (ITL) は、試合期①に最も高くなった。また、トレーニングの単調さを示す Monotony の値も試合期に増加し、トレーニングの評価として単調性が高い結果となった。さらに、オーバートレーニングの指標である Strain も、試合期に高くなった。Foster (1998) によれば、トレーニング負荷が高く、変動の少ない単調なトレーニングは、選手のコンディションを低下させると報告している。したがって、Training Load および Monotony が高いトレーニングを続けることは Strain の上昇を引き起こし、コンディションの悪化につながる可能性がある。そのため、トレーニングの変動性を見直し、コンディションの低下を防ぐ必要がある。3 種類のバランスパフォーマンス率を左右それぞれ平均すると、3 回目のテストでパフォーマンス率が高くなった。ITL の変動と併せてみると、試合期①の 6 週目に ITL が上昇し、その後 7.8 週目に下がった時にパフォーマンス率が上がった。しかし、試合期②の 15～16 週目では ITL が上昇し、その直後に実施したテストでパフォーマンス率が低くなった。このことから、ITL の変動がバランスパフォーマンスに影響を与える可能性が示唆され、今後はバランステストとコンディション評価の相関についてさらなる分析が必要である。

第 2 回 6 月 11 日

東原 綾子

陸上短距離走選手におけるハムストリングスの神経制御特性の分析と肉離れの影響について

スポーツ競技アスリートは日々のトレーニングによって骨格筋機能や神経応答といった身体能力の向上を図っている。例えば、陸上競技の短距離スプリンターは、走動作におい

て重要な役割を担うハムストリングスの筋横断面積が一般男性と比較して著しく発達していることが報告されている。一方で、このようなトレーニングによる適応が、神経制御特性においても認められるのかは明らかでない。また、ハムストリングス肉離れは再発率が高い外傷であり、先行研究によって肉離れ受傷筋の筋活動低下は再受傷のリスクファクターの一つであると指摘されているが、中枢神経系の関連については不明な点が多い。研究会では、動作を生み出す神経-筋制御特性に着目し、神経制御という新しい観点からスプリント能力向上やスポーツ外傷予防に貢献可能な知見を得ることを目的とした以下の 2 つの研究成果について報告した。

1. スプリンターの大腿二頭筋の神経-筋制御機構における競技特異的な変容特性について検討した結果、スプリンターは、競技に特化したスプリントトレーニングによって大腿二頭筋の皮質脊髄路の動員特性が変化し、筋出力の調整能力に優れた特徴を有している可能性が示唆された。
2. 肉離れ受傷既往が大腿二頭筋における皮質脊髄路入出力特性に及ぼす影響を検討した結果、肉離れ受傷後に皮質脊髄路の動員特性が変容し、受傷後の神経筋活動抑制に対して代償的に皮質脊髄路興奮性を高めている可能性を示唆するものであった。

第 3 回 7 月 9 日

山内 賢

体研でドローン体験

研究会は「ドローンを操作したことありますか？」の問いかけをスタートにした 2 部制で構成した。第一部は「ドローン de コーチング! (仮称命名)」の研究テーマ発足発言、および「ドローンが健康科学やスポーツ分野に貢献する可能性」を紹介した (①)。そして二部は操縦体験会 (②) を実施した。

① の内容：ドローンは本来軍事用として使用

されていた。近年、映画制作の迫力シーンをはじめ、ヒトだと危険な場所のインフラ点検や計量作業、災害被害の素早い情報収取、害獣退散、農薬散布作業、物流、趣味やスポーツ等、様々な要素/分野への活躍が期待されている。その最大の理由は、全てヒトがコントローラーで飛行中の障害物を避けながら操縦するようなラジコンヘリコプターと似て非なる点にある。つまり操縦者が視認できない障害物を、操作なしでもセンサによるオートマチックな飛行ができる自律飛行機能の事象にある。また加えてドローンは、撮影用カメラをはじめ、様々な調査用機器を搭載できるので、専用解析ソフトウェアで処理作業をすれば、画像による測量および分析に流用可能と考えられる。したがって近年は、「ドローンが空の産業革命を起こしている」といわれている。これらドローンに秘めた機能である映像、点検、監視、計量要素は、スポーツ科学、コーチング、健康教室、メディカル、教育分野へ応用する分析革命の創造に発展すると考えられる。

- ②の内容：体験会は100g以下のトイドローンを10機使用した。操縦はモニター無しを目視飛行で実施した。所員はドローンの上昇・下降、前後左右飛行、回転、ホバリングを体験・トレーニングした後に、ドローンに搭載されている赤外線発射によるシューティングゲームで25分程度楽しんだ。

第4回 10月15日

坂井 利彰

研究実践・教育実践・スポーツ振興実践の報告

1. 研究実践の報告

① テニス選手の育成パスウェイ

これまで研究をすすめてきたプロテニス選手の育成パスウェイと日本テニス協会の育成パスウェイモデルとの融合を行った。

② テニス選手のコンディショニング

塾庭球部においてアイススラリ・アイスバス・アイスベストなどを用いた暑熱対策を行った。

③ テニス選手の身体組成

塾庭球部においてハゴロモフーズから提供されたシーチキンを、トレーニング後に補食として摂取し、筋肉量の変化についての研究を行った。

④ テニス選手のパフォーマンス分析

テニス選手の試合のスタッツを分析することで、各選手に適した戦略を計量的な根拠に基づいて設定した。

2. 教育実践の報告

① テニス実技（初級・中級・Pearl）

② 体育学講義（スポーツコーチング概論Ⅰ）

③ 体育学講義（スポーツインテグリティ 寄附講座）

④ 体育会・スポーツインテグリティラボ

3. スポーツ振興実践の報告

① 横浜慶應チャレンジャー国際テニス大会

第5回 11月5日

加藤 大仁

スポーツ政策とスポーツ議員連盟

～議員立法の活性化と議員連盟、政策過程可視化という課題～

我が国のスポーツ政策について論じるにあたり、スポーツ議員連盟の存在に触れない訳にはいかない。平成期以降に限っても、スポーツ振興くじ法やスポーツ基本法の制定、スポーツ庁の設置など、スポーツ政策の根幹に関わる問題で、スポーツ議員連盟はその存在感を示してきた。

そこで、そもそも議員連盟とは何なのか説明し、主だった議員連盟の活動をいくつか紹介した。次いで、スポーツ議員連盟の歴史を簡単に振り返り、スポーツ議員連盟で政策が纏められていくプロセスにつき、新聞報道や先行研究を踏まえて解説するとともに、スポーツ議員連盟を舞台にスポーツ政策が議論

され取り纏められていくことの功罪について考察した。加えて、スポーツ議員連盟の中心的なメンバーの動向や、近年の立法過程の傾向などについても言及した。

第6回 12月10日

福士 徳文

脳性麻痺サッカー選手の競技力向上に関する基礎的研究

脳性麻痺者サッカー（以下、CPサッカー）は、比較的軽度な脳性麻痺者を対象として誕生したスポーツであり、パラリンピックでは1984年のニューヨーク大会から正式種目として採用されたが、2016年のリオデジャネイロ大会を後に、正式種目から落選している。CPサッカー男子日本代表においては、現在世界のトップ10を目指して強化に努めているが、科学的手法を用いて客観的にデータを蓄積し、強化・育成を進めてきた情報はみられない。また、本邦における科学研究費助成事業のうちCPサッカーを対象として採択された研究課題は見受けられず、主要なデータベースにアクセスが可能な論文も数少ない。CPサッカー競技としては、再びパラリンピックの正式種目となるべく世界的な競技普及が試みられており、特に近年では、ワールドカップや世界選手権と並行して、ヨーロッパ選手権、全米選手権、アジア・オセアニア選手権といった地域別の国際大会も開催されている。このような状況下において、CPサッカー界では、大学をはじめとする研究機関との連携を強化し、科学的サポートを充実させていく必要性が叫ばれている（フットボールの科学, 18(1), 2023）。そこで本研究では、CPサッカー選手の競技力向上の一助となるための基礎的資料を得ることを目的とした。

本発表では、CPサッカー男子日本代表チームの強化指定選手を対象に行った調査結果（①GPS機器を用いた試合中のデータ、②心理的特徴を明らかにするために行ったJISS

競技心理検査の結果）について、今後の展望も踏まえて報告した。

第7回 2025年1月14日

加藤 幸司

近年の大学教育についての一考

ここ十数年の間に大学を取り巻く教育・研究環境は大きく変化しており、現在もなお変わり続けている。そのことは少なからず我々の教育と研究への向き合い方や態度に影響を与えていることは否定できない。それでは、そうした大学における研究・教育環境の変化の背景には何があり、どのような問題を孕んでいるのであろうか。本研究会では、「大学グローバル化」をキーワードとして、国、文部科学省の大学グローバル化戦略をめぐる現状と問題点、教育に及ぼす影響について考察し発表した。発表の骨子は以下の通りである。

- ・教育再生実行会議の第三次提言（「これからの大学教育の在り方について」、産業競争力会議等による日本のグローバル化、大学グローバル化の危機的な遅れの指摘と憂慮
- ・可視的指標としての世界大学ランキングをめぐる問題
- ・「スパーグローバル大学創成支援事業」を軸とする文科省のグローバル化推進戦略とその抜け穴
- ・「スーパースーパーグローバル大学創成支援事業」のトップ型に認定された慶應義塾の取り組み、トライアルと問題点、ランキングのリーグテーブルに振り回される実態
- ・大学における教育の現状と教育の質的転換に立ちふさがる壁について
- ・繰り返されるグローバル化政策としての「国際卓越研究大学制度」について吉と出るか凶と出るか

第7回 2025年1月14日

佐々木玲子

幼少年期の動きの発達とその評価

発表の概要：

子どもの体力・運動能力の低下が指摘されて久しいが、同時に動きの未熟さも問題視されている。それらの要因として、身体活動量および様々な動きの経験の不足が挙げられている。幼少期の動きの獲得やその習熟は、生涯にわたる身体活動実施にも影響を与えることが指摘されている。本発表では、これら背景をレビューし、現代の幼少期の子どもを対象とした動きの観察的評価法およびそれに基づく基本的な動作習熟の実態などについて報告することを目的とした。

近年の子どもの運動機会の減少傾向に加えて、コロナウィルスなどの感染症の流行を受け、更なる体力・運動能力の低下および肥満の増加など子ども達は多くの負の影響を受けた。神経系機能の発達が著しい幼少期は、本来多様な運動を経験することによって、動きを獲得し、洗練していく時期であるが、その機会も著しく減少している実態がある。

発表者らは、これまでに、運動パフォーマンスの量的な評価に加えて、動作の質（動き方）に着目して、その評価方法（観察的評価）について検討し、幼少年期に身につけておくべき基本的運動について、それらの動きを評価する観点を提案してきた。この評価基準の特徴は、各動作について主体となる「身体部位の状態」と「動きの全体印象」に着目して評価するものであり、動きの改善に向けての指導につながることも意図している。主要な動作の評価結果から、全般に、基本的な動作は幼児から小学校中学年くらいまでにおおよそ身につくといえるが、幼児期での向上的な変化が著しい。「全体印象」の評価と実際の量的パフォーマンスとの関係性は比較的高く、全体的な動きの印象（特徴）を観察することで、パフォーマンスの良否を推測できる

可能性が示唆される。部分の評価ポイントについては、それぞれの評価項目によって加齢に伴う変化の様相が異なる。また、動きによっては性差もみられる。

幼少年期においては、このような観察的な評価を子ども達の日常的な活動場面においても活用し、動きの発達状態を適切にとらえながら実際の指導に生かしていくことが望ましいと考えられる。

3. 大学体育指導者全国研修会参加報告

報告者：村山光義、清水花菜、梅本雅之
期 日：2024年8月20日（火）～22日（木）
会 場：名城大学ナゴヤドーム前キャンパス

（1）研修プログラム

■第1日目（8月20日）

1-1. 基調講演

講師：アレキサンダー・ベネット（関西大学国際部）

演題：「武道はスポーツか：日本文化としての武道の独自性」

1-2. 事例報告

演題：「大学教育・大学体育と国際化」

報告者①：大森北寛（愛知県立北高等学校 校長）

「高等学校における海外につながり
のある生徒の実情と課題」

報告者②：梶田和宏（京都先端科学大学）

「京都先端科学大学でのSLSプログラム紹介」

2. 実技体験

種目：モルック

講師：岡本亮太（Clear Water Projectモルック部）

■第2日目（8月21日）

3. 選択式実技研修

（報告者はBコースを選択）

A コース

種目：ゴルフ

講師：近藤利弘（プロ）

会場：品野台カントリークラブ

B コース

・種目1：タグラグビー

講師：鈴木秀人（東京学芸大学）

・種目2：太極拳

講師：樊孟（名古屋大学他非常勤講師）

・種目3：英語で体育実技

講師：山内宏志（国際基督教大学）

・種目4：カバディ

講師：河合陽児（日本カバディ協会）

補助指導員：寺岡卓朗（愛知県カバディ協会）

会場：名城大学

4. ワークショップ

：「スポーツにおける暗黙知」

講師：鈴木裕輔（名城大学）

会場：名城大学

■第3日目（8月22日）

5. 実技体験

・種目1：車いすハンドボール

講師：岡田美優（一般社団法人Knocku）

・種目2：車いすバドミントン

講師：児玉友（日本福祉大学）

会場：名城大学

(2) 研修内容

1-1. 基調講演

本講演では、「武道はスポーツか：日本文化としての武道の独自性」をテーマに、武道の文化的意義と現代社会におけるその価値について講演がなされた。

講演では、スポーツ界の父と称される嘉納治五郎が築いた武道の歴史的背景を概説し、剣道や柔道など代表的な武道の哲学的基盤と教育的意義についての解説が行われた。特に、「ゲーミングシップ」(競技性を重視する姿勢)と、「勝っておごらず、負けて悔やまず」といった武道特有の理念の関係について深い考察がなされた。若年期は競技性が重視されるものの、武道に引退という概念がなく、中年以降は勝敗の捉え方が変化する点が指摘された。また、武道の国際化に伴う変容とその影響についても論じられ、伝統と現代社会の融合に向けた課題が共有された。

1-2. 事例報告

事例①「高等学校における海外につながるのある生徒の実情と課題」

近年、日本語指導が必要な外国人生徒の数が増加しており、特に愛知県では全国的に見ても突出している。こうした生徒への支援として夜間定時制高校ではハンディキャップの緩和措置を設け、日本語教育の充実や補習学習の機会を提供している。

また、進路面では正規就職よりも派遣労働を選ぶ傾向があり、就労支援としてアドバイザーの活用や外国人OBによる講演会を実施している。さらに、令和5年度から「日本語」を学校設定教科として導入し、長期的な言語習得支援を行っている。こうした取り組みは、NPO法人や大学との連携を通じ、外国人生徒の教育機会の拡充を目指している。

講演を通じて、言語の壁が学力や進路の選択肢に大きな影響を与えている現状を改

めて実感した。今後、外国人の子どもたちが平等に教育を受けるためには、日本語教育の強化だけでなく、進学や就職のサポートも一貫して行う必要があると感じた。

事例②「京都先端科学大学でのSLSプログラム紹介」

京都先端科学大学では、世界約40カ国から320名を超える外国人留学生在籍しており、国際社会で活躍するために必要なライフスキルの育成を目的とした「SLS(スポーツ・ライフ・スキル)」という共通コア科目を開講している。本プログラムでは、単なるスポーツ指導にとどまらず、意思決定力や課題解決能力、自己・他者理解といった「国際社会人基礎力」の向上を目指している。

カリキュラムの概要や教育実践の成果報告が行われ、成績評価にはルーブリックを活用し、学習成果を可視化する工夫がなされている。現代社会では、専門知識だけでなく、協働する力や異文化理解力が求められており、本プログラムはそうしたスキルを育む場となっている。グローバルな環境で生き抜くためには、語学力だけでなく、異文化理解やコミュニケーション能力が不可欠であると改めて感じた。特にスポーツを通じたライフスキルの育成は、実践的かつ効果的な手法であり、日本の教育にも参考にできる部分が多いと考えられる。

2. 実技体験「モルック」

体験会の冒頭では、日本モルック協会公認団体であるCWPモルック部の岡本氏から、基本ルールや競技の魅力についての説明があった。モルックはフィンランド発祥のスポーツで、木製のピンを使って得点を競う競技である。ルールはシンプルでありながら戦略性が求められるため、日本国内でも競技人口が劇的に増加しており、2024年度の世界大

会が函館で開催されるなど、注目度が高まっている。

モルックはシンプルなルールと手軽に参加できることから、運動が苦手な学生でも取り組みやすく、スポーツ導入教材として有効であると感じた。また、年齢や体力に関係なく、健常者と障がいのある方が共にプレーできるインクルーシブなスポーツであることも、多くの人々に支持される理由の1つであることがわかった。

体験会では、参加者全員でゲームを進める中で、戦略を練りながらスローの精度を高めることの面白さを実感した。初心者でもすぐにルールを理解しプレーができる点や、戦術を立てる過程で自然とチームメイトとのコミュニケーションが生まれる点は、単なるスポーツとしてだけでなく、交流のツールとしても非常に有用であると感じた。

現在はオリンピック競技への採用を目指した活動が進められており、今後さらに発展が期待できる種目であることがわかった。



モルックの様子

3. 選択式実技研修

Bコース（中国武術、カバディ）

中国武術では、樊孟氏の指導のもと、太極拳、カンフー体操および棒術を実践した。

1時間30分という限られた時間の中で、基本的な姿勢から動作を習得し、その過程で足腰の筋肉を強化するという目的に沿って体験が行われた。

中国武術にはさまざまな流派が存在し、内家拳（ゆったりとした連続動作が特徴）と外家拳（力強く素早い動きが特徴）に分けられる。太極拳は一見ゆったりとした動きが多いが、その動きから想像ができないほど足腰をしっかりと使うため、途中で汗が噴き出てくるほどの運動であった。一方、カンフー体操は太極拳とは対照的に、キレのある速い動きを求められるため、瞬発力やバランス能力が重要だと感じた。いずれも道具を使わずに実践でき、異なる刺激を取り入れられながら、動作の美しさを追求していく過程で体を鍛えられる点が印象的であり、まさに中国武術の奥深さを感じられた種目であった。

棒術では、樊孟氏による素晴らしい演舞に圧倒されながら、道具を使った動作の難しさを体感した。単に力だけでなく、柔軟性やイメージ通り正確に体を動かす高度な技術が求められ、動きの美しさと力強さを兼ね備えた武術の魅力を実感する機会となった。

午後のカバディ研修では、一般社団法人日本カバディ協会の河合氏より、競技の特徴や魅力についての講義を受けた。カバディはインドやバングラデシュを中心とした南アジア諸国で数千年の歴史を持つ伝統的なスポーツであり、インドでの競技人口は数百万人にのぼると言われている。また、「カバディ」という言葉自体に特定の意味はなく、競技が発展していく過程で定着した言葉であるとのことが印象的であった。

カバディは、鬼ごっことドッジボールを組み合わせた競技と例えられることが多く、スピードと駆け引きが求められる非常に緊張感のあるスポーツである。競技性を高くなっていくにつれ激しさが増すため、初心者や体力に自信のない参加者にはハードルが高い場面もあったが、年齢に応じたルール設定が可能なたため、導入しやすい競技であると感じた。そのため、河合氏は身近なものである「手つなぎ鬼」を応用することで、安全に導入3の

する方法を紹介された。また、女性が参加する際はコートサイズを調整し、男女問わず公平にプレーできるような工夫もされていることが印象的であった。

2026年のアジア大会では、カバディが正式種目として採用されることが決定しており、今後の競技発展に期待がさらに高まった。



中国武術の様子

4. 実技体験

研修最終日は、車いすスポーツの実技体験を行った。

前半は一般社団法人Knocku代表理事の岡田氏による車いすハンドボールを、後半は日本福祉大学の児玉氏と現役選手である関本氏による車いすバドミントンをを行った。両種目を通じて、車いすで移動する特有の技術や視点が求められることを実感し、健常者が体験することで障がい者スポーツへの理解が深まることを改めて認識した。競技ルールについても、車いすを使用することで通常のルールとは異なる点があり、例えばハンドボールではゴールが低く設定され、バドミントンではコートサイズが縮小されるなどの調整が行われていた。

車いすハンドボールは、ルールが簡単で、ボールを膝に抱えて移動できる点など、特別なスキルがなくてもすぐにゲームが楽しめるため、インクルーシブなスポーツとしての可能性を感じた。

車いすバドミントンは、ラケットを持ちながら車いすを操作し、シャトルの落下地点へ

素早く移動する必要があるため、予想以上に難易度が高く感じられた。しかし、健常者も丸椅子を使用することで、障がい者と同じ環境下でプレーできる点は、大学での実践としての工夫を感じられた。また、関本氏の貴重な話や、見事な車いすのハンドリングなどを間近で見ることができ、非常に有意義な体験となった。



車いすハンドボールの様子



車いすバドミントンの様子

今回の体験を通じて、障がい者と健常者が楽しめる場を創出する意義を再認識し、この知識を今後の指導や企画にどのように活かしていくかを深く考える貴重な機会となった。

最後に、研修会の運営に尽力された名城大学の先生および学生の皆様、東海支部関係者の皆様にご場をお借りして感謝申し上げます。

(文責) 梅本 雅之

4. 浅野均一記念研究奨励金・所内研究・学 事振興基金・潮田基金報告書

① 浅野均一記念研究奨励金

■研究課題

競泳キックスタートの動作分析

—日本代表選手の特徴—

研究代表者 梅本雅之

補助額 300,000円

競泳におけるスタート局面は、短距離種目のレース結果を大きく左右する重要な要素である。特に、2010年に国際水泳連盟（FINA）によって導入されたバックプレート付きのスタート台は、スタート動作の最適化に向けた技術革新をもたらし、キックスタートの普及を促した。このスタート技術は、スタート台からの跳び出し速度や角度を調整することで、水中推進力の向上を目的としている。バックプレートの位置設定が選手のスタートパフォーマンスに及ぼす影響については、いくつかの先行研究が存在するが、台上動作、特に後脚および前脚の関節角度の違いがパフォーマンスにどのような影響を与えるのか、競技レベル別の詳細な比較研究は限られている。本研究では、バックプレートの位置が競泳スタート局面における動作特性およびパフォーマンスに及ぼす影響を明らかにし、トップ選手と非トップ選手の比較を通じて、スタート技術の競技レベル別の特徴を検討することを目的とした。本研究は、国土舘大学の倫理審査委員会の承諾（承認番号第21024号）を受け、実験前にすべての対象者に本研究の目的、方法、安全性についての説明を行い、書面により参加の同意を得た。

本研究の対象者は、日本代表経験者を含む社会人および大学水泳部に所属し、キックスタートを習熟している男子競泳選手7名とした。対象者はバックプレートの位置を「前方（Front）」「中間（Prefer）」「後方（Back）」の3条件で試技を行い、各条件におけるブロッ

クタイム、入水時間、10m通過タイム、跳び出し速度（水平・鉛直）、跳び出し角度を測定した。さらに、モーションキャプチャシステムを用いてスタート合図時の後脚・前脚の関節角度（股関節・膝関節・足関節）を解析し、台上動作の違いを定量的に評価した。その結果、トップ選手は非トップ選手と比較して10mタイムが短く、バックプレート位置の影響を受けにくいことが確認された。その要因として、トップ選手は腰の高さや重心位置の調整、股関節角度を変化させることで、台上動作の変化を最小限に抑えていたことがわかった。また、非トップ選手は前足の股関節角度の動き出しがトップ選手よりも早く動き出す傾向を示し、これらの違いが、トップ選手と非トップ選手のスタートパフォーマンスの差に影響を及ぼしている可能性が示唆された。また、バックプレート位置の違いが10mタイムおよび跳び出し角度に影響を与え、跳び出し角度が0degに近づくほど、10mタイムが短くなる傾向を示した。特に後ろ足の股関節角度に変化を与え、スタート動作の動き出しや推進方向への力発揮に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

本研究では、腰の位置や重心位置、上肢の動作などの要素を直接測定しておらず、それらが台上動作に与える影響を明らかにするにはさらなる詳細な解析が必要である。また、競技者の身体的特徴（下肢の長さや体格）を考慮した解析を進めることで、より効果的な指導法の提案が可能となることが期待される。

本研究課題に関する発表

- Umemoto, M., Fujito, Y., Hyodo, H., Furuta, N., Wada, T., Funato, K., “Changes in the characteristics of lower front leg in kick start of swimming race at different back plate positionings”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年7月.

② 所内研究費

■ 研究 課 題

パラバドミントン車椅子カテゴリーの競技特性に関する研究

研究代表者 加藤幸司

研究分担者 加藤幸司 平野泰宏

補 助 額 555,500円

パラバドミントンは、障がいの程度によって参加できるクラスが細分化されており、車椅子を使用するカテゴリー（WH1、WH2）と立位カテゴリー（SL3、SL4、SU5、SH6）の6クラスが設けられている。各クラスには男女の各シングルスとダブルス及び混合ダブルスがあり、使用するコートの広さ（範囲）はカテゴリー、クラス及び種目（シングルス、ダブルス）によって異なる。ダブルスでは同じクラスのプレーヤー同士でペアを組むだけでなく、異なるクラスのプレーヤーと組む場合もある。こうしたことから、パラバドミントンのクラス間、種目間、男女間には競技特性に大きな差のあることが予想される。しかしながら、これまでパラバドミントンの競技特性について科学的アプローチにより蓄積したデータや、知見に基づいて言及した論文は極わずかしか見られない（Strapasson et al., 2018, Ribeiro et al., 2020, etc.）。パラバドミントンの運動特性や競技の特徴を正しく捉え、健常者の行うバドミントンとの違いを知ることは、コーチがトレーニングの方向性を見誤ることなく、パラバドミントンプレーヤーにより高いパフォーマンスを発揮させるために不可欠であり、同時に今後のパラバドミントンの普及・発展に大いに寄与するものと考えられる。

本研究では、世界トップレベルの車椅子カテゴリーの試合を分析し、戦術的ディマン드의側面から車椅子カテゴリーの試合の時間構造を明らかにすることを試みた。分析対象とした試合は、2021年パラリンピック東京大会と2019年第12回世界パラバドミントン選手

権大会の車椅子カテゴリーWH2男子シングルス及び女子シングルの試合の中からランダムに抽出された男女各10試合の計20試合であった。時間的要因とショット数に関する要因について分析した結果、両種目間で試合強度に差のあることがわかった。Total rally time、Rally time、% time played、Work densityとして表した時間的要因の変数は、男子シングルスが女子シングルスよりも強度の高い試合であったことを示していた。また、男子シングルスは女子シングルスに比べ、シャトルをヒットする回数がより多く、1点するためにより多くのショット数を要していた。ラリーのスピードやテンポの特徴を示すとされるShot frequencyは両種目間に差のないことがわかった。ただ、健常者のバドミントンでShot frequencyの差に影響を与えるとされる体力面での差を、車椅子カテゴリーのプレーヤーについてどのように評価するかは一つの課題として残された。男女を問わず障がいの部位や種類、程度等が異なるプレーヤーの体力を一定の尺度で評価することは困難なためである。

本研究結果から得られたデータが、車椅子カテゴリーWH2の試合特性を理解する助けになるとともに、コーチがトレーニング計画を作成する際の有用な情報になることが期待される。しかしながら、現時点でパラバドミントンに関する研究が絶対的に不足していることを考えると、今後さらに他のカテゴリーを含めたより多くの試合分析データを蓄積していく必要があると思われる。

尚、本研究は論文化され、体育研究所紀要（第64巻）に掲載された。

本研究課題に関する発表

加藤幸司, 平野泰宏 (2024) パラバドミントン車椅子カテゴリー WH2の競技分析—男子シングルス及び女子シングルス—, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 64(1):1-6.

■研究課題

DX導入で動きの「気づき」を強化する可能性追求と教材開発

～「ドローンでスポーツコーチング！」の創造～

研究代表者 山内 賢

補助額 486,050円

【背景】ドローンは開発当初、無人飛行による爆撃や偵察の軍事用目的で機密と専門に基づき活用されていた。現在は航空法の制約下で最新のテクノロジーが加わり、軍事機能を除外して個人の登録保有と操縦ができるほどに小型で安価な機器に進化した。またドローン操縦には多少のテクニックが必要となるが、トレーニングすれば困難でない。従って近年のドローン利用実態は「空の産業革命」と称されるまでに発展して、個人が楽しむ空撮以外に、専門家がヒトの侵入困難な災害現場調査、企業が荷物配達等、活用多面性が期待されている。一方でドローンを使った競技スポーツの人気は高まり、熱狂ファンが増加して、プロ化やオリンピックの正式種目に向かうムーブメントも見逃せない。

【目的】DXとは「ITやデジタル技術の浸透により、生活をあらゆる面でより良い方向に変化させること」を意味する用語である。申請者はドローン「撮影」「操作」をキーワードにしたスポーツ・健康・教育DXの可能性があると考えている。DXがスポーツや教育分野に導入されると、指導者と学習者双方にWhatの気づきを促進させて、自ら創意工夫するHowへいち早く発展するロジックが発生し易くなると同時に、コミュニケーションやコーチング力を最大限に引き出す条件発動やツールに成り得ると解釈して、大学体育でドローンを活用する教育DXのパイロットスタディや実証・開発研究に着手している。これはDXの観点から創造する教育ICT環境実現へのチャレンジであり、研究の大テーマを「ドローンコーチング（仮称）の創造」とし

て、運動動作の確認・評価ができる学習教材開発と持続可能な身体知への健康効果や評価を追求する投石でもある。以下にドローンの機能特性から予見できる利便性と効能を体育・スポーツ教育DXで実証研究するためのフォーカスとアイデアを列記する。

①ドローン画像の効用：画像解析法の一例である単眼計測法は、スケールさえ配備すれば物体位置や寸法を推測できるので、ドローン映像でも動作観察の可能性はある。

②ドローン操縦体験による運動感覚の補助作用：左右の手先を動かす繊細な操作で機体がどの様に移動するかを試行錯誤する体感は、市民講座やチュートリアルを開催することにより、コーディネーション能力の改善が期待できる。

【方法】①は、産学連携でドローン映像からのマーカーレスで非接触型動作分析システムの開発を試みている。②は、ドローンパイロットが「操作トレーニング後は乗り物運転時の視野が拡張して運転が楽に感じる」を発言した事例をトリガーに、「ドローン操作が運動と認知バイアス修正のトレーニングに応用できるかもしれない」という仮説を立てた。その検証を行うことで「日常生活動作の協調性能力改善」に寄与することができる。TMTは視覚的处理や空間的注意能力、ワーキングメモリーや認知的柔軟性能力の評価として考案されている。反応時間は脳機能の身体機能の連携に要する時間のことであり、認知的な課題を実行中の情報処理を明らかにするために用いられる。これらは操作体験前後の変化で簡易分析する。

【結果】ヒトの動作を定点カメラ映像で確認する骨格推定は近年の開発技術であり、企業現場やスポーツ科学等の分野における作業・運動動作解析などで活用されはじめている。本研究の開発システムは上記のインフラを活用して、ドローンによる人物撮影映像に骨格

情報をエフェクト、および未だ身体の一部であるが、QRマーカースケールとする位置情報の解析に成功した。ドローン操作による認知機能評価や改善の確認は解析途中であり検査方法を試行錯誤しながら来年度の課題としている（2025年に学会発表予定）。

【成果】動作を単眼計測法で画像分析する際は、定点よりもドローンカメラのほうが、撮影準備が容易であり、画角範囲の優越性と歪曲収差の不安解消に繋がる事例と骨格推定技術導入に関する実証を発表した（AAG, 2024）。

本研究課題に関する発表

“Gait Analysis Using a Drone: A Case Study”,
57th Australian Association of Gerontology
(AAG) Conference, Hobart Tasmania
Australia, 12-15 November 2024.

■研究課題

女性特有の健康課題を軽減するための効果的なヨガのプログラムの開発

研究代表者 奥山静代

補助額 293,100円

ヨガはアーサナや瞑想、呼吸法を用いて心の動きを穏やかにすること目的とし、「ヨガは心のはたらきを止滅することである」と定義づけられ（ヨガスートラ）、心と身体のバランスを保つのに効果的である。

本研究は、女性特有の健康課題を軽減するための効果的なヨガのプログラムの開発を目指し、現在の留学先（2023年度塾派遣留学）であるハワイ州におけるヨガについて調査し、慶應義塾大学的女子学生に対する支援に役立てることを目的とした。

ハワイはその自然の美しさと穏やかな気候から、ヨガの練習に非常に適した場所とされており、ヨガを実施する環境としては、屋外で自然を感じながら行うことができる場所が多く、特に海辺やビーチ、山や森林の中でのヨガがある。一方で、ハワイ州の“Department

of Parks and Recreation”は、ハワイ州内の公園やレクリエーション施設の管理、運営、保守を担当する政府機関であり、公共の公園、ビーチ、スポーツ施設、遊歩道などの施設を提供し、住民や観光客が楽しめるアクティビティやイベントの計画・実施を行っている。具体的には、①公園やレクリエーション施設の管理・整備 ②スポーツイベントやアウトドア活動の推進 ③市民向けのプログラムやクラスの運営 ④公共のビーチやレクリエーションエリアの維持管理 ⑤庭園や自然公園などの保護と環境保全があり、住民にとって魅力的で利用しやすい公共スペースを提供し、地域社会の福祉向上を図っている。ヨガについても複数プログラムが用意されており、今回Team Yogaに参加する機会を得た。当該クラスのヨガはポーズ（アーサナ）、呼吸法（プラナヤマ）、瞑想Body Awareness、ストレッチ、リラクゼーションを含み、心身の緊張をほぐし、心の安定とやすらぎを得ることを目的としていた。プログラムはプロップス（壁、椅子、ブロック）等を頻繁に利用し、ポーズをより安全に快適に行うことを目指した。特にチェアヨガは、基本的なヨガのポジションやポーズについて椅子を使ってアレンジするユニークなスタイルのヨガであった。また、ブロックを頻繁に利用し、柔軟性や安定性をサポートするとともに、加齢に伴う筋力の低下を補うためのポーズを中心にヨガのプログラムが組まれていた。今後は、引き続きハワイにおけるヨガについて調査を行い、女性特有の健康課題を軽減するための効果的なヨガのプログラムの開発に努めたい。

■研究課題

スポーツ心理学知見の現場適応に関する調査研究

研究代表者 永田直也

補助額 145,000円

近年の競技スポーツでは、アスリートやコー

チの精神的健康が注目されている。米国では、中央競技団体や大学が専門スタッフを配置するといった心理的支援体制を構築している。一方、日本では、競技スポーツにおける精神的健康という考えが希薄であったため十分な科学的知見が整っておらず、特に大学生スポーツにおいては支援体制が十分ではない。そこで本研究は、米国における現状を調査し、日本での適応に必要な知見を積み重ね、塾における支援体制構築に寄与することを目指すとし実施した。

本研究では、米国の大学にあるスポーツ心理学研究室を訪問し、支援実施と研究活動の連携について調査した。訪問したカンザス大学のスポーツ心理学に関連する部署は、教育・研究機関としてのSport & Exercise Psychology Lab. (研究室), アスリート支援を担当するAthletic Departmentに所属するSport PsychologistとClinical Psychologistが存在する。本年は、この教育・研究機関である研究室に所属し、調査を行なった。

研究室はアスリートサポートを担う部署ではないが、Athletic Departmentの依頼に応じて、支援活動も実施している。研究室は、8月の学年開始時には各スポーツチームの代表者を集め、チームビルディングの実施とその内容を各チームへ展開することを行なった。また、アスリートやコーチの相談に応じて、心理サポートも実施している。これらの活動は、研究室に所属する学生に対して、活動への参加や事例として検討する機会が与えられている。

本年は限られた時間の中で、教育・研究を担う機関がアスリートサポートを行う機会に参加することができた。研究室では、この活動に加え、社会に対してスポーツ心理学的知見の還元を行っている。次年度は、今年度のような活動に引き続き参加すると共に、社会貢献を行っている活動にも参加してスポーツ心理学知見の現場適応に関する事例を収集する。

■研究課題

脳性麻痺サッカー選手の競技力向上に関する基礎的研究

研究代表者 福士徳文

補助額 600,000円

【Introduction】

脳性麻痺サッカー（以下、CPサッカー）は、比較的軽度の脳性麻痺者を対象として誕生したスポーツであり、パラリンピックでは1984年のニューヨーク大会から正式種目として採用された。残念ながら2016年のリオデジャネイロ大会を後に、正式種目から落選しているが、再びパラリンピックの正式種目となるべく世界的な競技普及が試みられている。特に近年では、世界選手権と並行して、ヨーロッパ選手権、全米選手権、アジア・オセアニア選手権といった地域別の国際大会も開催されている。CPサッカー男子日本代表は、2023年度から新体制での活動をスタートし強化に努めているが、科学的手法を用いて客観的にデータを蓄積し、強化・育成を進めてきた情報はみられない。そのため、戦略的に、そして中・長期計画的に強化を行うための継続的な取り組みや引き継ぎがなされていないのが現状である。このような状況下において、日本のCPサッカー界では、大学をはじめとする研究機関との連携を強化し、科学的サポートを充実させていく必要性が叫ばれている（フットボールの科学, 18(1), 2023）。そこで本研究では、CPサッカー選手の競技力向上の一助となるための基礎的資料を得ることを目的とした。本年度調査では、CPサッカー男子日本代表候補選手を対象に体力テストを実施し、その特徴を明らかにすることが主であった。

【Methods】

被験者は、2024年CPサッカー男子日本代表候補選手の11名（24.9±4.93歳）であった。体力テスト項目は、30-m running (10, 20m transit time)、5m×3 シャトルラン、

vertical jump、standing broad jump、bounding、Yo-Yo intermittent recovery test level1 (YYIR1)、の計6種目であった。それぞれの測定は、参考文献（公益財団法人日本サッカー協会 2005, Bangsbo and Mohr. 2015, 文部科学省1999, 有賀ら 2016）に準拠し、実施した。

【Results】

各体力テスト結果の平均値および標準偏差を次に示す。10m transit timeは 1.98 ± 0.1 sec、20m transit timeは 3.4 ± 0.17 sec、30m transit timeは 4.74 ± 0.23 sec、5m×3シャトルランは 4.46 ± 0.21 sec、vertical jumpは 47.09 ± 6.11 cm、standing broad jumpは 1.88 ± 0.25 m、boundingは 9.64 ± 0.86 m、YYIR1は 956.36 ± 361.53 m、であった。

【Discussion & Conclusion】

本研究の実施により、今まで明らかにされていなかったCPサッカー男子日本代表候補選手の体力特性が明らかになった。また、本調査で得られた結果をU-20日本代表（Japan Football Association, 2021）や、全日本大学選抜（Japan University Football Association, 2024）の結果と比較したところ、全て低値を示す結果であった。したがって、CPサッカー男子日本代表選手の今後の強化策の一つとして、サッカーのパフォーマンスに必要とされる体力的側面（フィジカルパフォーマンス）の向上は必須であることが示唆された。

本研究課題に関する発表

Fukushi, N., Lee, W., Miyamori, T., Momoi, Y., “A Basic Study on the Improvement of Athletic Performance of football Players with Cerebral Palsy”, 30th Annual Congress of the European College of Sport Science にて発表予定。

■研究課題

オスグッドシュラッター病患者における大腿直筋の機能・形態・質的特性の相互関係に関する横断研究

研究代表者 稲見崇孝

研究分担者 山口翔大 柄澤玄宏

補助額 227,000円

オスグッドシュラッター病（Osgood-Schlatter Disease: OSD）に関する最新の系統的 review によると（Ladenhauf et al., 2020; Lucenti et al., 2022）、OSDは活動的な若年層に多くみられ、骨格筋の収縮による牽引性骨端炎を特徴とする。明確な病因を規制する因子の一つに大腿四頭筋、特に大腿直筋の影響があり（Nakase et al., 2015; Watanabe et al., 2018）、走る、蹴る、しゃがむ、ジャンプを繰り返す競技スポーツを行うものにOSDが多いことが理解されている（Change et al., 2013; Itoh et al., 2018）。骨格筋の評価は、筋力や関節可動域などに関する機能評価や、サイズや量に関する形態評価が代表的であるが、近年はこれにかたい・やわらかいといった質的评价が加わった骨格筋3特性から調査が行われる。健常者における骨格筋特性は、加齢により質→形態→機能の順序にて不全が生じることから（Inami et al., 2016）質的评价の重要性が再考されはじめたが、超音波エラストグラフィを用いたstiffness評価の有用性が拡大していることもその背景にある。Enomotoら（2021）の報告によると、OSD患者における大腿直筋のstiffnessはOSDではない大腿直筋と比べて高い（硬い）ことが報告されており、機能・形態を含めた3特性の相互関係を横断的に調査することにより、将来的な治療戦略の一助となることが期待される。本研究では、OSD患者における大腿直筋の機能・形態・質的特性の相互関係を横断的に調査することを目的とした。OSDと診断された53名の参加者が本研究に参加した。測定項目は、大腿直筋の機能特性として踵と臀部の距離

(Heel-Buttock Distance: HBD) を、形態・質的評価としての stiffness には超音波せん断波エラストグラフィ機能で解析したせん断弾性率をそれぞれ用いた。また、visual analogue scale を用いた主観的な痛みとの関係についても解析した。その結果、大腿直筋のせん断弾性率と主観的疼痛との間には関係が見られませんでした。HBD との間には有意な関係が見られ、HBD は大腿直筋せん断弾性率の 26% を説明した。超音波せん断波エラストグラフィを使用して測定された stiffness は、筋線維方向の硬さを反映している (Inami et al., 2016)。本結果は大腿直筋のせん断弾性率と HBD の有意な関係を説明しているが、その関係は弱い関係であり、HBD が大腿直筋のみならず、腱、靱帯皮膚、皮下脂肪などの他の組織も含めて評価していることが反映された結果といえる。ただし、超音波せん断波エラストグラフィ機能を備えた超音波装置は高価であることを考慮すると、HBD は OSD 患者の大腿直筋の stiffness を測定するための選択肢であり続ける。現在、英文海外雑誌の査読中である。

■研究課題

大腿部における皮質脊髄路興奮性評価法の妥当性検討

研究代表者 東原綾子

補助額 329,000円

これまでの研究において、過去にハムストリングス肉離れを受傷した脚と非既往脚について、大腿二頭筋における皮質脊髄路の入出力特性を分析することで、ハムストリングス肉離れ受傷後の皮質脊髄路興奮特性を検証した。その結果、肉離れ既往脚は非既往脚に比べて、最大傾斜が有意に高かった。このことから、過去のハムストリング肉離れ受傷脚では、皮質脊髄路興奮性が変容している可能性が示唆された。本研究成果は、肉離れ受傷後に起こる筋の機能低下のメカニズム解明につ

ながるものである。今後さらなる分析を進めていくとともに、スポーツ実践現場における評価指標の策定を目指すなければならないが、アスリートへの負荷を考慮すると、これらの評価は簡便に実施されることが必要である。そこで本研究では、皮質脊髄路興奮性評価の簡便化を図るため、3点回帰法による大腿部筋における皮質脊髄路興奮性評価の妥当性を検証した。

運動習慣を有する成人男性12名を対象とし、大腿二頭筋における皮質脊髄路の入出力特性を分析した。腹臥位、膝屈曲30°における等尺性最大膝屈曲運動時の大腿二頭筋の筋活動を測定し、その20%に相当する筋活動を発揮させ、測定脚と対側の一次運動野に磁気刺激を行ない、大腿二頭筋より誘発電位 (MEP) を得た。各刺激強度 (10~100 % outputmax) の平均 MEP を基に得られた刺激-応答曲線における最大傾斜を算出した。また、運動閾値の1.1倍 (1.1AMT)、1.2倍 (1.2AMT)、1.3倍 (1.3AMT)、1.4倍 (1.4AMT) の刺激強度で磁気刺激を行った際の MEP を得た。1.1AMT、1.2AMT、1.3AMT での刺激時と1.2AMT、1.3AMT、1.4AMT での刺激時の MEP からそれぞれ3点回帰により傾きを算出し、刺激-応答曲線における最大傾斜との相関性を検証した。その結果、2通りの3点回帰の傾きはいずれも刺激-応答曲線における最大傾斜と有意な関係性を認めなかった。このことから、刺激-応答曲線における最大傾斜を3点回帰法で評価することは難しく、今後別の方法を検証していく必要があることが明らかとなった。

■研究課題

新体操女子選手を対象としたコントロールテストおよびコンディション評価の検討

研究代表者 清水花菜

研究分担者 星川佳広

補助額 429,090円

新体操は、美しさと高度な技術の融合が求

められる審美系スポーツであり、選手には柔軟性、バランス感覚、動作精度、そして芸術性が必要とされる。こうした要素を高いレベルで発揮するためには、適切なトレーニング負荷の管理が不可欠である。しかし、試合前の“通し練習”の反復や体重管理、月経などの要因は、選手にとって身体的・心理的な負荷を高める要因となり、演技パフォーマンスや健康に影響を及ぼす可能性がある。近年、トレーニング負荷を簡便に評価する手法としてセッションRPE法が注目されているが、特に大学生選手のように学業と競技活動を両立する環境下での適切な負荷管理については、依然として明確な指標が確立されていない。本研究では、大学女子新体操選手を対象にセッションRPE法を用い、試合準備期間におけるトレーニング負荷の変動をモニターすることを目的とした。

大学新体操部に所属する個人競技選手7名を対象に、全日本選手権を控えた17週間にわたって評価を行った。トレーニング時間、セッション当たりの自覚的運動強度(sRPE)、内的負荷(ITL)を記録し、ACWR(短期的・長期的急負荷比)およびMonotony(負荷の単調さ)、Strain(総合的負荷)を算出した。また、身体組成測定を行い、体重や体脂肪率の変動とsRPEの関係を解析した。

試合①(全日本学生選手権)に向けた第6週の合宿では、ITLが13,860AU、ACWRが1.93に達し、急激なITL増加が確認された。この増加は、夏休み期間中に集中練習が行われた結果であり、演技の完成度向上を目的とした“通し練習”の反復によるものと考えられる。しかし、急激な負荷増加は疲労の蓄積や負傷リスクを高める可能性があり、段階的な負荷調整の必要性が示唆された。試合②(全日本選手権)に向けた準備期でも、ITLやMonotonyの上昇が確認され、身体的・心理的負荷の増加が懸念された。また、トレーニング時間とsRPEには、各選手において相関係数(r)

0.24~0.58の有意な相関が認められ、トレーニング時間がsRPEを高める可能性が示唆された。しかし、両者の相関は強くなく、ITL管理にはトレーニング時間だけでなく、内容や強度の評価も重要であると考えられた。

体重の変動に関しては、体重減少群が維持群よりも試合期においてsRPEが高い傾向を示し、体重減少が選手のITLを高めている可能性が示唆された。一方で、月経期と非月経期のsRPEに有意差は認められなかったものの、月経期の値がわずかに高く、月経が選手の身体的・心理的コンディショニングに影響しうる可能性が考えられた。

これらの結果を通じて、大学生新体操選手において、その特有性を考慮したトレーニング負荷管理が必要であること、そしてセッションRPE法はその有用な手段であることが示された。さらに、体重管理や月経周期といった個々の選手の特性を考慮した負荷管理の必要性が浮き彫りになった。

本研究課題に関する発表

清水花菜, 星川佳広, 橋爪みずず, “大学女子新体操選手(個人競技)に対するセッションRPE法を用いた試合に向けたトレーニング負荷管理”, 日本女子体育大学トレーニングセンター紀要, 28:9-16, 2024.

③ 学事振興資金

■研究課題

ヨーロッパサッカーを醸成する文化を探る

研究代表者 須田芳正

研究分担者 福士徳文

補助額 500,000円

本研究の目的は、選手を育成する立場である指導者の目線から日本と欧州におけるそれぞれのサッカーの競技特性、文化、課題を明らかにすることであった。2024年度は3年計画の1年目であったが、概ね計画通り進めることができた。今年度の調査対象は、ドイツ、

オランダ在住のサッカー指導者4名であった。調査方法は、深層的インタビュー法を用いて、自由回答的、かつ半構造的インタビューにより行った。質問項目は、基幹的質問、追跡的質問、探索的質問の三種類の組み合わせにより構成した。録音された音声データをテキストデータにし、KH Coderを用いて計量的に分析した。また、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワーク図(共起ネットワーク)を描き、それを元に代表的な文章を抜粋した。描かれた共起ネットワークから、代表的な文章を抜粋すると、「欧州では秀でた特徴がある子は、ピックアップされるネットワークが構築されている」、「アマチュアクラブからでもプロに上がっていく選手が輩出されるケースは多い」、「その国が追求し続けるサッカースタイルが決まっている国もあるが、失敗すると即座に改革に着手する場合もある」などの語りがみられた。オランダのテレビ中継では、一般視聴者からもピッチ上で起きている現象に基づいた解説が求められ(白井2017)、イタリアの育成システムにおいては1歳単位でチームが編成される(宮崎2018)など、文化に合わせた捉え方や育成システムが構築されているが、今回の調査においてもサッカー文化を醸成するシステム構築への認識が日本と欧州とでは異なる可能性が窺えた。2年目となる2025年度には、継続してデータ収集および分析を進め、国内外での学会発表を経て、当該研究領域における基礎的研究資料としていち早く引用されるよう、論文掲載への準備を進めていく。

■研究課題

パフォーマンス評価の対象拡大を目指した複数デバイスの組み合わせによる網羅的検証

研究代表者 稲見崇孝

研究分担者 山口翔大 西岡卓哉

加藤貴昭 森林貴彦

堀井哲也 小林宏充

千田健太

補助額 998,000円

昨年度から継続してデータを蓄積している力-速度プロファイル (Force-Velocity Profile: F-V Profile) をパフォーマンス向上の有益な指標として、1) より簡便な指標となる基礎的知見の獲得、2) 野球以外の他競技スポーツへの展開を目的とした。1) については、F-V Profileを算出するために必要なジャンプ高に影響を与えないセグメントの変位を基にスマートフォンを用いてより正確にジャンプ高を算出する方法へと接続できた。ジャンプ高を正確に算出するには地面反力計による「力積法」が高い信頼性を有するため、ゴールドスタンダードとされている。しかしながら、この力積法は精度が非常に高い反面、機器が大きく持ち運びが難しいこと(基本的に実験室にて測定)、さらに取り扱いに専門的な知識を要するため使用者が限定されるというデメリットがある。一方、ジャンプ中の滞空時間を基に高さを逆算する「滞空時間法」は、軽量なマットなど簡易なデバイスを用いることで誰でも手軽に測定できるメリットがあるものの、力積法と比較して最大10cmもジャンプ高を過大評価する可能性が先行研究で指摘されている。これを改善するため、①スマートフォンのカメラをスローモードで撮影、②ジャンプの離地時の大転子の高さを画像上で水平線として記録、③ジャンプ、④再びその水平線が大転子が通過するまでの時間(修正滞空時間法)からジャンプ高を算出、というプロセスを設定することでゴールドスタンダードである力積法によって算出したジャンプ高とほぼ同等の値(誤差:0.2cm)かつ非常に強い正の相関関係($\rho=0.987$)を示した。

2) については、申請書の計画通り、ホッケー、サッカーへ展開した。F-V Profileは「Force」「Well-balance」「Velocity」の3つに

その極値「High-Force」「High-Velocity」の合計5タイプに分類する。これまで蓄積してきた塾高野球部の事例では、F-V Profileをベースとしたトレーニングによって甲子園優勝時のメンバーは約半年でほとんどのメンバーの除脂肪体重（筋肉量）の増加とprofileの変化が確認できているが、2024年度ベンチ入りチームとスクワットやベンチプレスというトレーニング種目の最大挙上重量の値を比較すると10kg近くの差があることがわかった。同様にホッケー、サッカーでも「High-Velocity」タイプが部員の半数以上を占めており、野球と同様にシンプルな挙上重量の不足が課題であった。現在、陸上でも上記1)の知見を反映したアプリを用いたF-V Profileの測定が行われている。

なお、ホッケー選手におけるF-V Profileに関する知見と氷上vs陸上フィジカルパフォーマンスとの関係について、2025年度の日本氷上スポーツ学会での発表を予定している。

本研究課題に関する発表

Nishioka, T., Yamaguchi, S., Inami, T. Flight time method modified: Development of a novel and more accurate method for measuring vertical jump height using a smartphone application. International Journal of Sports Physiology and Performance, 20:56-64, 2024.

■研究課題

大学女子学生の月経とコンディショニングに関する知識・意識調査と講習会の有用性検討

研究代表者 東原綾子

補助額 300,000円

多くの女性アスリートにとって、月経サイクルとコンディションは密接な関係にある。本塾の女子学生が月経前症候群に関わる心身の状態を把握し、体調管理に活用することは、パフォーマンス向上やスポーツ外傷・障害予

防において非常に重要な要素となるだけでなく、教育的観点も含めた日常生活の質向上においても重要である。我々がこれまで本塾体育会に所属する女子学生に対して実施した質問調査（奥山, 東原ら, 2024）によると、月経前症候群により競技パフォーマンスに障害を感じている女子学生が一定数いるにも関わらず、不調に対して対策を行っている女子学生は少ないことが明らかとなった。この要因として、月経とコンディショニングに関する知識や意識の乏しさが影響している可能性もあり、体調管理、特に月経に関する知識を学ぶ機会が必須であると考えた。そこで本研究では、本塾でスポーツ活動を行っている2つの団体（球技系種目16名および採点系種目19名）を対象に、①月経に関する知識および意識調査、②普段の競技（日常）生活と月経周期に関する質問、③睡眠や食事などの生活状況に関する質問調査を行った。その後、月経随伴症状（MDQ）をはじめとした対象者の状況（月経周期に関連して生じる身体・精神的症状によって女性が抱く心理的苦痛を定量化した指標）を集計し、個別のフィードバックを行うとともに、月経周期とコンディショニングに関する講習会を実施し、月経とコンディショニングに関する知識保有の認識調査を行った。

月経周期を考慮したコンディショニングを実践するためには、月経周期を記録・把握し、日々のコンディション変化の記録をつけることが必要となる。月経周期の詳細を把握するためには基礎体温を記録することが必要になる。しかし、対象者に行ったアンケート調査によると、「基礎体温とは、婦人体温計を使用して口腔内体温を測定することだと知っていますか？」という問いに対しては、半数以上（35名中18名）が「知らない」と回答し、月経周期とコンディショニングに関する知識と意識が乏しいことが示された。この現状を踏まえ、月経とコンディショニングに関する知識と意識の啓発を目的とした講習会を実施した。

内容は、①月経に関する基礎知識、②月経とコンディショニングの考え方、③スポーツ活動時における月経諸症状に対するの対応方法、の教授であった。講習会後の認識調査によって、月経周期とコンディショニングに関する知識を得ることができたことが確認され、本研究で行った講習会は月経周期とコンディショニングに関する知識、意識を向上させることに有効であったと考えられる。さらに、月経随伴症状（MDQ）をはじめとした対象者の状況について調査し、個別のフィードバックを行ったことで、対象の学生一人一人が自分自身のコンディショニングについて意識を高く持つ機会となったと考えられる。また、希望者には基礎体温計を配布し、実際に基礎体温の記録によるコンディショニング管理を実践してもらった結果、現在に至るまで基礎体温計測をコンディショニングに活用している学生もいる。本件は大きな成果であると考えており、実際に基礎体温計を用いて月経周期の把握を実践することは、月経に関する知識・意識啓発の一環として重要であると考えられた。本研究では塾内2団体に対する講習会実施に留まったが、今後はより多くの団体を対象に、女性特有のコンディショニングに関する知識を得る機会を必須とする必要性が示唆された。

■研究課題

競泳競技における汗乳酸が競技パフォーマンスに与える影響に関する実験的研究

研究代表者 梅本雅之

補助額 500,000円

競泳競技において、運動強度の指標として血中乳酸濃度が一般的に用いられているが、血液サンプルの採取には侵襲性を伴い、リアルタイムでの測定が困難であるという課題がある。このため、より手軽かつ迅速に乳酸値を評価する方法として、汗中乳酸濃度の測定が注目されている。

本研究では、競泳選手のトレーニング中の生理的応答を評価するため、汗中乳酸濃度と心拍数の関係を解析し、その有用性を検討することを目的とした。特に、汗中乳酸濃度が運動強度の変化に応じてどのように変動するかを明らかにし、競泳競技における負荷指標としての可能性を評価した。

研究対象は、大学競泳部に所属する男子競泳選手2名とし、トレーニング中の汗中乳酸濃度および心拍数の測定を行った。実験では、選手が最大努力で泳ぐ高強度インターバル（50m×6本）を実施し、その前後およびインターバル間で汗中乳酸濃度と心拍数を測定した。測定には、非侵襲的な汗乳酸センサー（株式会社グレースイメージング）を用い、リアルタイムのデータ収集を行った。心拍数はワイヤレス心拍計（Polar Verity Sense）を用いて記録し、運動中の心拍数を測定した。その結果、運動強度の上昇に伴い心拍数が上昇し、汗中乳酸濃度も増加する傾向が確認された。特に、高強度のインターバル後には、汗中乳酸濃度が運動開始時より増加する傾向があり、心拍数の変化と似た推移を示した。一方で、運動終了後の回復過程では、心拍数の低下と汗中乳酸濃度の変化には時間的なズレが見られた。これは、汗中乳酸が皮膚表面に分泌されるまでの時間差に起因する可能性が考えられ、血中乳酸濃度と同様に代謝過程の遅延を反映している可能性がある。また、測定データには一部のばらつきが認められた。これは、測定環境の影響を受けた可能性が考えられる。特に被験者が泳ぐ際に、スイミングキャップの隙間から水が浸入した可能性があり、汗の採取量が一定でなかった可能性が示唆された。このことから、実験準備の段階で適切な浸水対策を徹底し、データの精度向上を図る必要があると考えられる。

本研究の結果から、汗中乳酸濃度は心拍数と同様に運動強度の変化を反映する可能性があるものの、その関連性をより詳細に検討す

る必要があることが示された。特に、心拍数とは相関がある傾向を示したが、被験者数が少なく、実験回数も限定的であるため、今後の検証が求められる。

今後の研究では、通常の練習環境下で汗中乳酸濃度と血中乳酸濃度を同時に測定し、両者の相関関係を明確にし、汗中乳酸濃度が血中乳酸濃度の代替指標としてどの程度有効かを明確にするための比較検討を行う。また、測定技術の開発や浸水の影響を最小限に抑えるための対策について検討を進める。こうして得られたデータを基に、国内外の学会で発表するとともに、専門誌への論文投稿を目指し、競泳選手のコンディショニング管理やトレーニング最適化に貢献するため、より実践的な研究を進めていく。

④ 潮田記念基金

■採択者 須田芳正

補助額 102,802円

用務の目的 研究打合せ、情報収集【延世大学先導融合体育研究所との国際交流協定に基づく共同研究の打合せならびに延高戦（延世大学対高麗大学）の視察のため】

・陸教授、李教授と面会

日本と韓国におけるスポーツ教育の現状について詳細な情報交換を行った。両国の文化的背景や教育システムの違いについても議論があり、研究だけでなく学生間の国際交流という面で非常に前向きな検討を行うことができた機会となった。延高戦の歴史についても説明があり、1965年に始まったこの伝統ある対抗戦は、野球・バスケットボール・アイスホッケー・ラグビー・サッカーの5競技で勝敗が決まる。過去の戦績は、延世大学の21勝20敗10引き分けと、非常に拮抗している。今回の対抗戦は特別な事情により、ラグビーを除く4種目で行われる。早慶戦との類似点も多く、両国のスポーツに大きな影響を与え、

大学スポーツの発展に大きく寄与している重要なイベントであることを再認識した。

・延世大学キャンパス見学

バスケットボールコート、剣道場、テコンドー場、体育館、水泳場など、充実した設備を見学した。トレーニングセンターでは、トレーニングセンター長の全（チョン）教授による施設紹介が行われた。特に印象的だったのは、全教授らが大学のキャンパス内にある病院と連携し、リハビリ患者に対する運動サポートを提供しているという点であった。学内のスポーツ教育と医療が連携している点は、非常に学ぶべきところが多くあった。トレーニング施設のスタッフは大学院生も行い、中には有資格者によるトレーニングプログラムの作成やサポートがあることも印象的であった。

・延高戦観戦

野球、アイスホッケー、サッカーの3種目を観戦した。延高戦という韓国の伝統的な対抗戦を通じて、延世大学のスポーツ文化や教育システムの充実ぶりを体感した。特に、延高戦の歴史的意義と競技そのもののレベルの高さに加え、学生や卒業生が一体となって応援する姿は、競技を超えた連帯感を感じさせるものであった。

以上、今回の視察を通して、今後のスポーツ教育や大学間交流のさらなる発展に役立つ知見を得ることができた。

■採択者 石手 靖

補助額 102,467円

用務の目的 延世大学先導融合体育研究所との国際交流協定に基づく共同研究の打合せならびに延高戦（延世大学対高麗大学）の視察のため

2024年9月26日から9月29日まで4日間、体育研究所員6名で韓国ソウル市の延世大学を視察した。その主な内容を以下にまとめた。

1. 延世大学先導融合体育研究所の教員と、

日本と韓国におけるスポーツ教育の現状、両国の文化的背景や教育システムの違い等についても議論した。その結果、研究だけでなく学生間の国際交流という面で非常に前向きな検討を行うことができた。

2. 延世大学キャンパス（バスケットボールコート、剣道場、テコンドー場、体育館、水泳場、トレーニングセンター他）を見学し、それら施設の充実度を実感した。特にトレーニングセンターでは、センター長による施設紹介を拝聴し、キャンパス内にある病院と連携し、リハビリ患者に対する運動サポートを提供しているという点が印象的であった。
3. 延高戦5種目の内の3種目（野球、アイスホッケー、サッカー）を観戦した。延高戦という韓国の伝統的な対抗戦を通じて、延世大学のスポーツ文化や教育システムの充実ぶりを体感した。特に延高戦の歴史的意義と競技そのもののレベルの高さに加え、学生と卒業生が一体となって応援する姿は、競技を超えた連帯感を感じさせるものであった。

以上、今回の視察を通して今後のスポーツ教育や大学間交流のさらなる発展に役立つ知見を得ることができた。

■採択者 村山光義

補助額 227,431円

用務の目的 学会発表

発表演題

Murayama M, Nagata N, Shimizu K, Teraoka E, Inami T, Fukushi N, Higashihara A, Okuyama S, Sasaki R, “Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution”, 29th Annual congress of the European College of Sport Science, Glasgow, (England), Book of abstract, p842, 2024.7.2-5.

会議出席の概要

2024年7月2-5日にイギリスのグラスゴー市内で開催された、第29回ヨーロッパスポーツ科学会議に出席し、e-posterによる研究発表（タイトル：Faculty members’ perceptions of implementing assessment rubrics for physical education in a Japanese higher education institution）を行った。また、会期中に教育学関連のセッション、筋と筋膜の変化、筋力トレーニング、筋損傷と回復などのセッションに参加するとともにポスターセッションに参加して関係する研究テーマに関する情報収集を行った。さらに、海外研究者（Edith Cowan University：Nosaka教授、National Taiwan Normal University：Chen教授など）との情報交換、教育学におけるルーブリックの在り方に関する意見交換（東北大学：永富教授、大阪工業大学：西脇准教授など）を行い、近年の多くの研究事例などについて知ることができた。

■採択者 山内 賢

補助額 200,000円

用務の目的 学会発表

発表演題

Ken Yamauchi, Susumu Hashiguchi, Mei Yamauchi, Tsutomu Ichikawa, Hironori Yoshida, Takashi Miyahira, Hiromichi Hasegawa, Naoki Obayashi, “Gait Analysis Using a Drone: A Case Study”, 57th Australian Association of Gerontology (AAG) Conference, Hobart Tasmania Australia, 12-15 November 2024.

11月12日から15日に、オーストラリアのタスマニアで「2024 AAG (Australian Association of Gerontology) 57th Conference」が開催された。AAGは老年学分野の研究、教育、実践等における学際的な組織であり、学術会議の研究発表内容が科学者、健康・介護関連事業者、

一般市民等の多面多様な情報源になっている。発表内容が世界中に配信されて今後の開発研究のパートナーを発掘できる期待を込めて研究発表を試みた。演題は「Gait Analysis Using a Drone: A Case Study (無人航空機(ドローン)を用いる歩容解析の新たな試み)」である。ドローンに付随する機能性と汎用性は、自立飛行に加えてカメラが搭載できるので、様々な分野での活躍が予見できる。その理由は専用解析ソフトウェアで処理をすれば、測量と分析ができる点にある。さらに一機で広範囲の画角やアングルをカバーできる飛行撮影機能は、定点カメラの複数台利用を回避できる経済性も確認できる。ただし操縦を伴うので、実験中に人員配置の安全管理をはじめ、技術と技能を伴う。近年において歩行能力と転倒、または健康リスクの相関に関する理念やエビデンス報告は多く、同時に画像解析から暴露された歩容パラメーターを基礎資料とする転倒予防システムの開発もあとを絶たない。従って発表はドローンの機能特性と歩容観察による健康管理の実態に鑑みて、ドローン活用による歩容分析が技術的に実用可能であることを開示するパイロット研究とした。会場では「ドローンで歩容分析する方法が斬新」の意見を頂戴しながら、アイデアに興味を持つ学会参加者と有意義な談義ができた。これはドローンが空の産業革命と称されて、様々なシーンで利用する可能性を秘めている所以にあると考える。発表当日はドローン活用による歩容観察・改善の可能性と健康寿命関連の質問と研究の珍しさに関する会話も加わり盛況に終了した。

■採択者 福士徳文

補助額 250,000円

用務の目的 学会発表

発表演題

Fukushi, N., Tamura, T., Hasegawa, D., Suda, Y., “A Fundamental Study on GPS

Data in College Futsal Lessons”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年7月.

本研究は、GPS機器を用いて大学体育フットサル授業における移動距離、移動スピード、心拍数を明らかにすることを目的とした。本発表では、2023年度春学期授業(4月～7月)の全14回のうち、測定を実施できた11回分のデータを提示した。本研究の分析項目は、活動時間、総移動距離、時速18km以上での移動距離(Standard Intensity, 以下SI)、時速21km以上での移動距離(High Intensity, 以下HI)、スプリント回数(時速24km以上が計測された回数)、最高速度(瞬間的な最高速度)、平均心拍数であった。各分析項目の平均値および標準偏差を算出した結果、活動時間は73.13±5.46分、総移動距離は3,009.23±613.96m、SIは19.38±18.36m、HIは2.54±7.56m、スプリント回数は0.01±0.09回、最高速度は19.50±2.03km/h、平均心拍数は146.72±14.12回であった。

本発表においては、Ohmuro et al. (2020)が、日本国内のトップレベル選手(Adult)と高校生選手(Youth)のフットサル試合中の移動距離や移動スピードの割合を定量化した報告や、厚生労働省(2013)が定める生活習慣病を予防するための運動基準などを参考に、大学体育フットサル授業におけるGPS機器取得データの活用について考察した内容を報告した。

■採択者 東原綾子

補助額 273,000円

用務の目的 学会発表

発表演題

Ayako Higashihara, Genki Futatsubashi, Kento Nakagawa, Hirofumi Sekiguchi. “Recruitment Properties of Corticospinal Excitability and Cortical Inhibition of the Hamstring Muscles in Sprinters” Annual

Meeting of American College of Sports Medicine. 28th-31th May 2024, Boston, USA.

アメリカ・ボストンで開催された、第71回アメリカスポーツ医学会に参加し、研究発表を行った。本研究では、陸上短距離走選手のスプリント能力に大きく貢献するハムストリングスの中枢神経系を含めた神経-筋制御機構の分析を行った結果、陸上短距離走選手は、一般運動群と比較してハムストリングスにおける筋出力調整能力が高いことが明らかになった。これは長期間のスプリントトレーニングの積み重ねによって、スポーツ動作を生み出す神経-筋制御特性が変容し、競技特異的な特徴を示す可能性を示唆するものであった。本研究成果に対し様々な意見を受け、有意義な議論を行うことができた。

発表抄録は以下の通りである。

PURPOSE: The neuromuscular activity in the hamstring muscles is vital for rapid force control of the lower extremities during sprint running. It has been suggested that well-trained sprinters have greater volume of hamstring muscles than non-athletes or other athletes. As sprinters usually repeat sprint running, these repeated competitive movements could lead to not only a muscle hypertrophy but also plastic changes in the central nervous system innervating the lower extremities, enabling improvement of movement-specific control. This study aimed to clarify the characteristics of corticospinal excitability and cortical inhibition of the hamstring muscles in sprinters.

METHODS: A total of 10 elite sprinters and 12 control participants (recreationally active males) were included in this study. The excitability of the corticospinal pathway during isometric contractions of the biceps

femoris muscle was investigated by transcranial magnetic stimulation. The stimulus intensity and amplitude of the motor-evoked potentials (recruitment curves) demonstrated a sigmoidal relationship. The maximum slope, plateau value, and threshold of the recruitment curve were calculated. Additionally, we assessed the silent period duration reflecting degree of cortical inhibition. Each parameter was compared between groups using the independent t-test.

RESULTS: The maximal slope of the recruitment curve of the corticospinal excitability of the biceps femoris was significantly lower in sprinters than in control subjects (8.9 ± 4.9 vs. 16.2 ± 10.1 , $p = 0.049$). Meanwhile, the threshold (27.3 ± 10.1 vs. 35.1 ± 15.5 , $p = 0.204$), plateau value (395.5 ± 184.1 vs. 496.2 ± 151.5 , $p = 0.194$), and silent period duration (113.7 ± 10.9 vs. 115.3 ± 9.7 , $p = 0.721$) did not differ between the groups.

CONCLUSION: The lower slope of the recruitment curve of corticospinal excitability in sprinters indicates that the biceps femoris muscle of sprinters is capable of gradually adjusting the motor output compared to control participants. This specific recruitment property of corticospinal excitability of the biceps femoris in sprinters can reflect the plastic change in the corticospinal pathway due to long-term sprint training.

■採択者 清水花菜

補助額 250,000円

用務の目的 学会発表

発表演題

清水花菜, 菅家沙由梨, 佐々木玲子, “Relation between motion characteristics and evaluation of split leap in rhythmic gymnastics”, 第29回ヨーロッパスポーツ科

学会議 (The 29th European College of Sport Science), グラスゴー (Glasgow), 2024年7月2-5日。

2024年7月にグラスゴーで開催されたヨーロッパスポーツ科学学会 (ECSS) に参加し、新体操の「split leap」に関する研究成果を発表した。本研究では、新体操選手6名を対象に3次元動作分析を用いて異なる競技レベルにおける「split leap」の動作を比較し、その特性と高得点を得るための動作方法を明らかにした。具体的には、競技レベルの違いによる動作の変化や、評価に影響を与える要素として、股関節の開脚角度と前脚の振り上げ角速度に焦点を当てた。

結果として、本研究では骨盤の回旋を伴う静的開脚位が最も大きな開脚角度を示し、ジャンプ動作では上級者ほど開脚角度の維持時間が長く、振り上げ脚の角速度がその保持に影響を与えることが確認された。これらの要素は審判の評価基準と一致し、高得点を得るためには、開脚角度を大きく維持することが重要であると示唆された。

ポスター発表を通じて海外の研究者との質疑応答が行われ、特に空中での股関節角度を維持するために必要な要素についての理解が深まり、技術的な改善点やトレーニング方法についての具体的な知見を得ることができた。他の審美系競技におけるバイオメカニクス分野についても触れ、フィギュアスケート、体操、バレエなどの動作分析を通じて、技術評価と実際の動きに関する視野を広げることができた。このような知見は、広範な審美系競技における技術向上にも寄与し、さまざまな競技に共通する技術的な要素を学ぶ貴重な機会となった。

■採択者 梅本雅之

補助額 250,000円

用務の目的 学会発表

発表演題

Umemoto, M., Fujito, Y., Hyodo, H., Furuta, N., Wada, T., Funato, K., “Changes in the characteristics of lower front leg in kick start of swimming race at different back plate positionings”, 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, 2024年7月。

競泳競技における異なるバックプレート位置が、競泳キックスタート時の前脚（ロワーフロントレッグ）の足関節・膝関節・股関節の角度にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的とした。本研究の対象者は、大学および社会人競泳選手7名の男子スイマーとし、全員がキックスタート技術を習得している者とした。実験では、スタート台のバックプレート位置を「前方 (Front)」と「後方 (Back)」の2条件に設定し、各試技における前脚の関節角度（足関節・膝関節・股関節）を測定した。

測定にはモーションキャプチャーシステム (PrimeX13 OptiTrack, Acuity Inc., Japan) を使用し、スタート合図（0秒時点）から入水までの三次元座標データを収集した。被験者の身体各部には合計25個の直径12.7mmの反射マーカーを装着し、標準的な解剖学的測定点に基づいて配置した。本研究の結果、前脚の足関節・膝関節・股関節の関節角度には、バックプレート位置による有意な差は認められなかった。バックプレートの位置が前方 (Front) でも後方 (Back) でも、スタート前の関節角度や最大屈曲角度に大きな変化は見られなかった。一方で、バックプレート位置の変化は、競技者の重心位置と後脚の動作に影響を与える可能性が示唆された。バックプレートの位置が変わることで、選手は重心位置を調整し、後脚の動作によって適応する可能性があることが示された。

Ⅲ. 教育活動記録

Ⅲ－１．授業の実施（教育委員会）

2024年度の体育科目全体の履修者数は6,371名（前年比＋353名）となった。以下に詳細な履修者統計と授業評価の結果を示し、本年度教育活動の報告と次年度に向けた課題を挙げる。

１．2024年度体育科目履修者統計

１）体育学講義と体育学演習

2024年度は、体育学講義Ⅰが４コマ（対前年１コマ減）、体育学講義Ⅱが５コマ（同比同数）、体育学演習が２コマ（同比同数）を開講

した。体育学講義のタイトルおよび履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトルおよび履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。

履修者の合計は、体育学講義で253名（対前年比107%）、体育学演習で17名（対前年比154.5%）となり、前年と比較してやや増加した。また、昨年新たに開講された「トレーニング科学演習」や「スポーツとジェンダー ～女性スポーツを考える～」では履修者の増加傾向が見られ、徐々に認知度が高まっていると考えられる。今後も、スポーツ科学やスポーツ理念をより多面的に学べる機会を提供し、学生の関心をさらに広げていきたい。

表Ⅲ-1-1. 2024年度 体育学講義の担当者及び履修状況

授 業 名	科 目 名	担 当 者	履修者数
体育学講義Ⅰ	スポーツコーチング概論Ⅰ	坂井 利彰	55
	スポーツ統計学の基礎	鳥海 崇	45
	メガスports・イベント論	村山 光義、稲見 崇孝	14
	スポーツコーチングとアスレチックトレーニング論	山内 賢	22
体育学講義Ⅱ	スポーツとジェンダー ～女性スポーツを考える～	佐々木玲子、東原 綾子、 清水 花菜	27
	スポーツ・インテグリティ（寄附講座）	坂井 利彰	34
	ハイパフォーマンスとトレーニング科学	稲見 崇孝	28
	スポーツ進化論	村山 光義	13
	健康とスポーツの科学	山内 賢、井ノ口美香子、 武田 彩乃、横山 裕一	15
合 計			253

表Ⅲ-1-2. 2024年度 体育学演習の担当者及び履修状況

科 目 名	担 当 者	定 員	一 次 申告者数	倍 率	最 終 履修者数	充足率
トレーニング科学演習	稲見 崇孝	10	10	1.00	10	100%
スマートフィットネス& アスレチックトレーニング演習	山内 賢	20	6	0.30	7	35%

2) 体育実技 A・B

(体育実技 A：ウィークリースポーツクラス)

表Ⅲ-1-3に体育実技 A（ウィークリースポーツクラス）の担当者と種目、表Ⅲ-1-4に種目別履修状況を示す。

陸上競技場の改修工事が完了し、春学期からリニューアルされた競技場でサッカーやソフトボールなどの授業が通常通り開講された。一方、三田キャンパスでの実技開講科目減少により一部履修者数の減少が見られたものの、日吉・三田を合わせた一次申告者数は11,653名（対前年比96％）、最終的な履修者数は6,371名（対前年比105.8％）となり、前

年より約250名増加した。

体育実技科目の定員充足率は全体で81.7％と、前年（81.9％）とほぼ同じ水準を維持し、安定した履修者数を確保できた。また、昨年度から履修調整方法を各教員による調整方式に変更し、二次取消期間を廃止したことで、履修取消者数は対前々年比306％減少したと考えられる。

今後も、履修希望者ができる限り受講できるよう調整を進めるとともに、授業内容の充実を図り、学生が体育実技を通じてより多くの学びを得られる環境を整えていきたい。

表Ⅲ-1-3. 2024年度 体育実技 A（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担 当 者	種 目
教 授	佐々木玲子	エアロビクス
〃	石手 靖	バレーボール
〃	村山 光義	バレーボール, フライングディスク, レクリエーションスポーツ
〃	加藤 大仁	バスケットボール
〃	村松 憲	テニス
〃	山内 賢	ハンドボール, フィットネストレーニング, スマートウォーキング
〃	須田 芳正	サッカー, フットサル
〃	野口 和行	バレーボール, レクリエーションスポーツ, バックカントリースキル (バックパッキング)
〃	吉田 泰将	剣道
〃	加藤 幸司	バドミントン
〃	坂井 利彰	テニス
准 教 授	鳥海 崇	水泳
〃	福士 徳文	フットサル
〃	稲見 崇孝	フィットネストレーニング
専 任 講 師	東原 綾子	ソフトボール, ボディメイクエクササイズ (オーバーヘッドスポーツ)
助教 (有期)	清水 花菜	エアロビクス, ボディメイクエクササイズ
〃	梅本 雅之	水泳
非常勤講師	服部 智大	軟式野球
〃	朝飛 大	柔道
〃	鷺見 全弘	水泳
〃	小幡 典子	アーチェリー
〃	勝又 正浩	ゴルフ
〃	中島世衣良	ゴルフ

	担 当 者	種 目
非常勤講師	金指みの利	バレエエクササイズ
〃	岩見 雅人	バスケットボール
〃	木塚 孝幸	バスケットボール
〃	甲谷 勇平	バスケットボール
〃	木林 弥生	卓球
〃	常行かおり	卓球
〃	久保田正美	空手
〃	河乃 建仁	気功
〃	平野 泰宏	バドミントン
〃	大嶽 真人	サッカー
〃	黄 大城	サッカー
〃	三宅 諒	フェンシング
〃	四戸 紀秀	フットサル
〃	櫻井 秀	ボクシング
〃	久永 将大	器械体操
〃	杉本 亮子	ボディコンディショニング（ヨガ&ピラティス）
〃	木村 奈美	ボディコンディショニング（ピラティス）
〃	谷野 悦代	ボディコンディショニング（ピラティス）
〃	高木 聡子	太極拳
〃	川島 颯	テニス
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	鳥屋 智大	テニス
〃	原 莊太郎	テニス
〃	宮本 千晶	テニス
〃	藤平 信一	合気道
〃	小山 加楠	フィットネストレーニング
〃	塩島 絵未	フィットネストレーニング
〃	細野 雅歳	バレーボール
〃	矢作 拓也	バレーボール
〃	棟朝 銀河	トランポリン
〃	土屋江里子	自動車

表Ⅲ-1-4. 2024年度 体育実技A（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科 目 名	コマ数			定 員	一 次 申告者数	倍 率	最 終 履修者数	充足率
		春学期	秋学期	計					
日 吉 地 区	アーチェリー	2	2	4	80	198	2.48	72	90%
	合気道	1	1	2	60	43	0.72	42	70%
	エアロビクス	6	6	12	180	303	1.68	174	97%
	空手	1	1	2	56	17	0.30	18	32%
	器械体操	1	1	2	40	45	1.13	34	85%
	気功	2	2	4	120	204	1.70	171	143%
	剣道	4	4	8	160	35	0.22	34	21%
	ゴルフ	6	6	12	248	994	4.01	240	97%
	サッカー	6	6	12	480	616	1.28	418	87%
	自動車	3	3	6	120	362	3.02	111	93%
	柔道	2	2	4	120	35	0.29	36	30%
	水泳	11	11	22	550	260	0.47	240	44%
	スマートウォーキング	1	1	2	40	18	0.45	16	40%
	ソフトボール	4	4	8	192	270	1.41	202	105%
	太極拳	2	2	4	80	53	0.66	53	66%
	卓球	5	5	10	240	405	1.69	216	90%
	テニス	14	14	28	740	771	1.04	619	84%
	トランポリン	1	1	2	48	130	2.71	41	85%
	軟式野球	1	1	2	60	58	0.97	51	85%
	ハンドボール	2	2	4	144	108	0.75	95	66%
	バスケットボール	15	15	30	720	975	1.35	632	88%
	バックカントリースキル	0	2	2	28	18	0.64	15	54%
	バドミントン	7	7	14	346	853	2.47	326	94%
	バレーボール	11	11	22	750	1,693	2.26	651	87%
	バレエエクササイズ	3	3	6	96	76	0.79	76	79%
	フィットネストレーニング	10	10	20	400	809	2.02	370	93%
	フェンシング	2	2	4	60	74	1.23	51	85%
	フットサル	12	12	24	582	802	1.38	512	88%
	フライングディスク	2	2	4	100	85	0.85	51	51%
	ボクシング	2	2	4	200	178	0.89	161	81%
	ボディコンディショニング (ピラティス)	4	4	8	160	417	2.61	163	102%
	ボディコンディショニング (ヨガ&ピラティス)	2	2	4	88	242	2.75	88	100%
	ボディメイクエクササイズ (オーバーヘッド)	1	1	2	32	13	0.41	22	69%
	レクリエーションスポーツ	3	3	6	160	140	0.88	138	86%
	日 吉 合 計	149	151	300	7,480	11,300	1.51	6,139	82.1%
三 田 地 区	テニス	5	5	10	140	184	1.31	106	76%
	剣道	2	2	4	40	21	0.53	17	43%
	合気道	1	1	2	60	30	0.50	21	35%
	ボディメイクエクササイズ	2	2	4	80	118	1.48	88	110%
	三 田 ・ 芝 合 計	10	10	16	320	353	1.10	232	72.5%
日 吉 ・ 三 田 合 計		159	161	316	7,800	11,653	1.49	6,371	81.7%

(体育実技 B：シーズンスポーツクラス)

表Ⅲ-1-5に体育実技 B（シーズンスポーツクラス）の担当者及び履修状況を示す。

本年度は 7 種目（同比同数）を開講し、履修者数は 241 名（対前年比 130.3 %）、充足率は 112 %（対前年 30.2 % 増）と、履修者数・充足率ともに前年を上回る結果となった。また、一次申告者数も前年より 52 名増加（23.5 % 増）し、シーズンスポーツへの関心の高まり

が見られた。

夏季に実施されたマリンスポーツアクティビティは、天候の影響により大学の施設を活用しての実施となった。急な対応を要したが、円滑に進行できたことは今後の運営において貴重な経験となった。今後は、他の種目を含め、様々な状況を想定した対応策を事前に検討し、より柔軟な運営体制を整えていきたい。

表Ⅲ-1-5. 2024年度 体育実技 B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

月	科 目 名	担 当 者	定 員	一 次 申告者数	倍 率	最 終 履修者数	充足率
8月	山岳	野口 和行	15	19	1.27	17	113%
8月	ビーチバレー	石手 靖	30	41	1.37	19	63%
8月	マリンスポーツ アクティビティ	鷲見 全弘 鳥海 崇	25	55	2.20	56	224%
8月	セーリング（ヨット）	真行寺 誠 梅本 雅之	25	30	1.20	19	76%
9月	アウトドア レクリエーション	野口 和行 村山 光義	40	40	1.00	42	105%
2月	スケート	小山 正 野口 和行 梅本 雅之	30	29	0.97	32	107%
2月	スキー	吉田 久彦 村山 光義 佐々木玲子 福士 徳文 東原 綾子 清水 花菜	50	59	1.18	56	112%
合 計			215	273	1.27	241	112%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、大綱化以降の新カリキュラム移行時から体育実技を履修した学生による授業評価アンケートを30年以上独自に継続実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に取り組んできた。授業評価アンケートは、授業担当者が学生からのフィードバックを活用し、個々の授業をより良い授業へと改善していくことを目的として実施されるが、2024年度より全塾的に統一した授業評価アンケート「全塾共通授業評価アンケート (Keio Student Evaluation Initiative: KSEI)」に移行することとなった。

体育科目における集計結果を以下に示す。表Ⅲ-1-6はアンケート回答者数、表Ⅲ-1-7

にはアンケート調査の質問項目を示した。アンケートの各質問項目には「強くそう思う」(5点)、「そう思う」(4点)、「どちらとも言えない」(3点)、「そうは思わない」(2点)、「全くそう思わない」(1点)の5段階で回答させ、集計ではそれぞれの項目を得点化して科目ごとの平均値を算出した。

表Ⅲ-1-6. 授業評価アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	671
秋学期ウィークリー	905
春学期講義・演習	22
秋学期講義・演習	25
シーズン	70

表Ⅲ-1-7. 授業評価アンケート質問項目 (体育実技 A・B、体育学講義 I・II、演習)

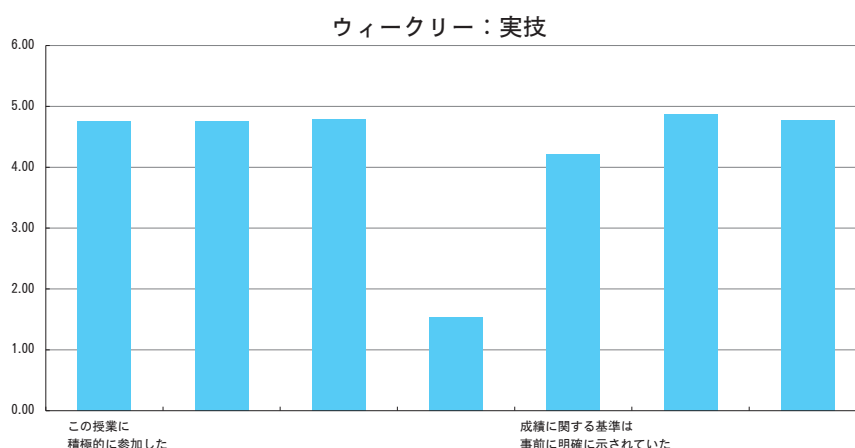
履修者全員 (講義・演習・実技) 回答	
設問1	この授業に積極的に参加した
設問2	授業の内容を十分に理解できた
設問3	教員の説明はわかりやすかった
設問4	学修の負荷が大きすぎた
設問5	成績に関する基準は事前に明確に示されていた
設問6	全体としてこの授業に満足している
設問7	この授業を他の学生にもすすめたい
自由記述	
設問8	このクラスを受講した理由や動機について、あなたの意見を聞かせてください。
設問9	授業の内容で良かった点、改善してほしい点について、あなたの意見を聞かせてください。
設問10	講師の良かった点・改善してほしい点について、あなたの意見を聞かせてください。

1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

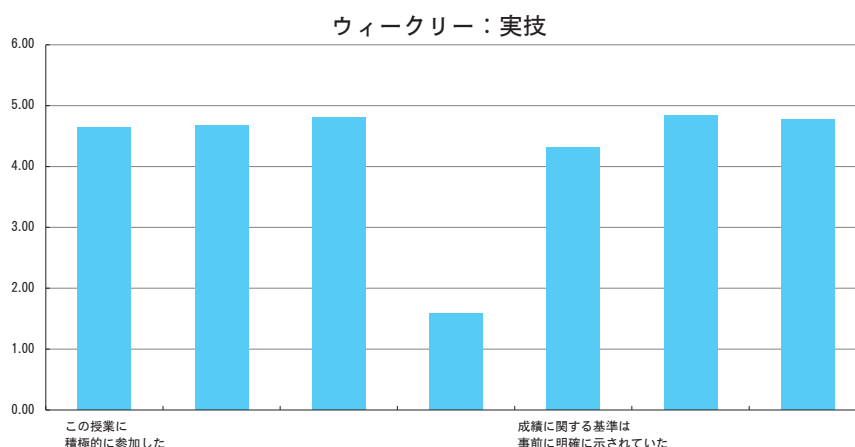
体育実技ウィークリー種目における質問項目別5段階評価の平均値を図Ⅲ-1-1および図Ⅲ-1-2に示した。表Ⅲ-1-8および表Ⅲ-1-9には種目別の5段階評価を示した。結果をみると、以下のようにまとめられる。

春・秋の学期間に大きな差はなく、同様の傾向が得られた。全般に4.5点以上の肯定的評価が多かった。平均値で最も高い評価となった項目は、「全体としてこの授業に満足している」(春：4.87±0.17、秋：4.84±0.20)であり、履修学生の満足度が高いことが確認

された。また、「教員の説明はわかりやすかった」(春：4.79±0.23、秋：4.81±0.23)、教員に対する評価についても高い値を示した。一方、平均点が低いものは「成績に関する基準は事前に明確に示されていた」(春：4.22±0.56、秋：4.32±0.51)であった。成績評価は、学習の評価の総体として捉えられ、各授業の教育・学習目標と連動したものであることが望まれる。シラバスに掲載された授業計画に対応した成績評価を行なうものとして学生が理解できるよう、授業時に明確な教示が必要であり、今後の課題である。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期実技ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期実技ウィークリー全体平均）

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

種 目 名	回答数	回答率	この授業に積極的に参加した	授業の内容を十分に理解できた	教員の説明はわかりやすかった	学修の負荷が大きすぎた	成績に関する基準は事前に明確に示されていた	全体としてこの授業に満足している	この授業を他の学生にもすすめたい
アーチェリー	25	73.5	4.77	4.81	4.96	1.41	4.09	4.85	4.80
エアロビクス	30	36.1	4.64	4.73	4.84	1.49	3.32	4.87	4.81
ゴルフ	18	14.6	4.75	4.74	4.70	1.34	4.14	4.75	4.66
サッカー	28	13.7	4.37	4.52	4.70	1.62	4.37	4.90	4.80
スマートウォーキング	2	18.2	5.00	5.00	5.00	2.00	3.50	5.00	4.50
ソフトボール	21	21.0	4.55	4.70	4.74	1.67	4.53	4.74	4.70
テニス	33	9.6	4.84	4.91	4.92	1.44	3.96	4.84	4.84
トランポリン	3	15.0	5.00	5.00	5.00	2.00	4.67	5.00	4.67
バスケットボール	67	21.7	4.57	4.57	4.80	2.15	4.36	4.25	4.22
バドミントン	6	3.7	5.00	5.00	4.80	1.00	4.60	5.00	4.80
バレエエクササイズ	14	43.8	4.96	4.82	4.93	1.11	4.09	4.93	4.85
バレエボール	39	12.5	4.69	4.75	4.72	1.61	4.34	4.75	4.73
ハンドボール	5	10.4	4.50	4.50	4.50	3.25	4.13	4.88	4.75
フィットネストレーニング	52	28.1	4.62	4.65	4.60	1.69	4.28	4.66	4.53
フェンシング	1	4.8	5.00	5.00	5.00	1.00	4.00	5.00	5.00
フットサル	98	38.6	4.28	4.42	4.44	1.45	4.16	4.45	4.47
フライングディスク	9	36.0	5.00	4.75	5.00	1.34	4.75	4.84	4.84
ボクシング	4	6.7	4.84	5.00	5.00	1.17	5.00	5.00	5.00
ボディメイクエクササイズ	3	5.9	4.50	4.75	4.75	1.25	4.50	5.00	5.00
ピラティス	5	12.2	5.00	5.00	5.00	1.00	2.25	5.00	4.50
ヨガ&ピラティス	8	9.1	4.78	4.56	4.67	1.11	3.19	5.00	5.00
レクリエーションスポーツ	9	16.1	4.77	5.00	5.00	1.83	4.00	5.00	5.00
気功	13	18.8	4.90	4.42	4.47	1.00	4.35	4.95	4.95
空手	3	60.0	5.00	5.00	5.00	1.00	5.00	5.00	5.00
剣道	13	50.0	4.95	4.89	4.95	2.25	3.78	4.95	4.81
合気道	25	83.3	4.69	4.81	4.88	2.15	4.34	4.81	4.66
自動車	25	48.1	4.81	4.66	4.85	1.40	4.76	5.00	5.00
柔道	4	33.3	5.00	4.84	5.00	1.50	5.00	5.00	5.00
水泳	23	17.8	4.97	4.94	4.88	1.53	4.49	4.99	4.97
太極拳	25	92.6	4.40	4.35	4.43	2.05	4.15	4.80	4.73
卓球	22	20.6	4.85	4.86	4.82	1.15	4.61	4.89	4.80
軟式野球	7	25.9	4.29	4.43	4.00	1.14	4.43	4.71	4.43
実技全体	640	平均	4.76	4.76	4.79	1.53	4.22	4.87	4.77
		標準偏差	0.22	0.20	0.23	0.48	0.56	0.17	0.20

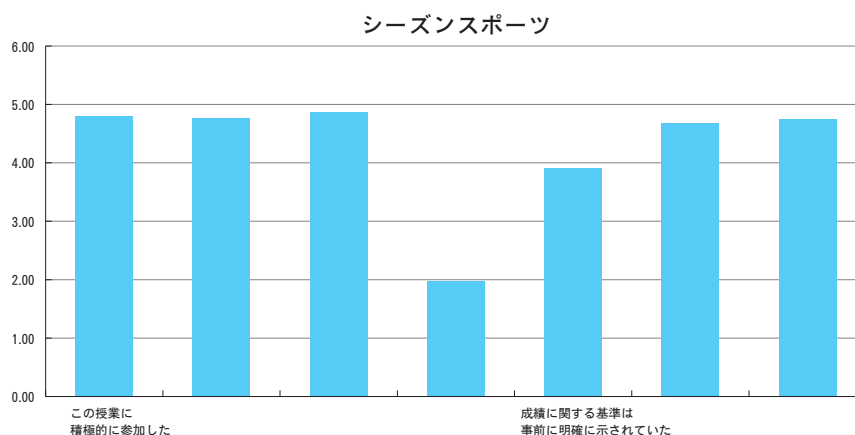
表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種 目 名	回答数	回答率	この授業に積極的に参加した	授業の内容を十分に理解できた	教員の説明はわかりやすかった	学修の負荷が大きすぎた	成績に関する基準は事前に明確に示されていた	全体としてこの授業に満足している	この授業を他の学生にもすすめたい
アーチェリー	13	34.2	4.63	4.69	4.69	1.27	3.74	4.69	4.59
エアロビクス	34	37.4	4.87	4.95	4.78	1.21	3.85	4.95	4.95
ゴルフ	9	7.8	4.75	4.78	4.83	1.33	4.53	4.70	4.70
サッカー	51	24.3	4.75	4.75	4.64	1.48	4.56	4.78	4.78
スマートウォーキング	3	60.0	5.00	5.00	5.00	2.67	5.00	5.00	5.00
ソフトボール	22	21.8	4.75	4.94	5.00	1.95	4.68	4.88	5.00
テニス	59	15.6	3.97	4.31	4.33	1.26	4.12	4.57	4.59
トランポリン	5	23.8	5.00	5.00	5.00	1.40	4.80	5.00	5.00
バスケットボール	196	60.9	4.31	4.39	4.50	1.85	4.28	4.44	4.43
バックカントリースキル	2	14.3	5.00	4.50	5.00	1.00	2.50	5.00	5.00
バドミントン	8	4.9	4.80	4.90	5.00	1.50	4.37	4.90	4.90
バレエエクササイズ	20	46.5	4.68	4.66	4.81	2.02	4.28	4.88	4.59
バレエボール	55	16.5	4.59	4.82	4.85	1.71	4.23	4.82	4.83
ハンドボール	10	21.7	4.30	4.30	4.10	3.10	3.40	4.20	3.90
フィットネストレーニング	27	14.7	4.83	4.84	4.88	1.59	4.43	4.98	4.95
フェンシング	4	13.3	4.34	4.50	4.84	1.67	4.00	4.84	4.84
フットサル	160	62.0	4.32	4.61	4.65	1.66	4.44	4.75	4.73
フライングディスク	10	38.5	4.04	4.21	4.67	1.63	4.54	5.00	4.79
ボクシング	7	7.0	5.00	5.00	5.00	1.79	5.00	5.00	5.00
ボディメイクエクササイズ	25	49.0	4.81	4.81	5.00	1.57	4.40	4.93	4.93
ピラティス	1	2.4	5.00	4.00	5.00	1.00	5.00	5.00	5.00
ヨガ&ピラティス	12	15.0	4.63	4.58	4.58	2.00	4.01	4.48	4.33
レクリエーションスポーツ	13	15.9	4.58	4.94	5.00	1.14	4.06	4.94	4.83
器械体操	19	82.6	4.47	4.89	4.95	1.42	4.05	5.00	5.00
気功	13	12.7	4.75	4.37	4.54	1.50	4.80	4.70	4.60
空手	10	83.3	4.50	4.60	4.60	1.20	4.90	5.00	4.50
剣道	21	84.0	4.72	5.00	5.00	1.48	4.13	5.00	4.79
合気道	25	75.8	4.62	4.68	4.86	1.88	4.59	4.97	4.95
自動車	4	6.8	4.67	5.00	5.00	1.17	4.67	5.00	5.00
柔道	2	8.3	5.00	4.50	5.00	1.00	3.50	5.00	5.00
水泳	37	33.6	4.59	4.91	4.93	1.71	4.32	4.92	4.91
太極拳	23	88.5	4.23	4.37	4.49	2.27	4.41	4.64	4.55
卓球	12	11.0	4.73	4.60	5.00	1.13	4.79	5.00	5.00
軟式野球	6	25.0	4.50	4.33	5.00	1.50	4.50	4.50	4.50
実技全体	918	平均	4.64	4.67	4.81	1.59	4.32	4.84	4.78
		標準偏差	0.27	0.27	0.23	0.45	0.51	0.20	0.25

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における5段階評価の平均値を図Ⅲ-1-3および表Ⅲ-1-10に示した。授業評価は多くの項目が平均値4点以上の肯定的評価が得られている。特に「教員の説明はわかりやすかった」(4.87 ± 0.20)、

および「この授業に積極的に参加した」(4.79 ± 0.33)が高い得点を示した。一方で、ウィークリースポーツと同様に「成績に関する基準は事前に明確に示されていた」(3.92 ± 0.71)は他の項目と比較して低い値を示した。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価（シーズンスポーツ平均）

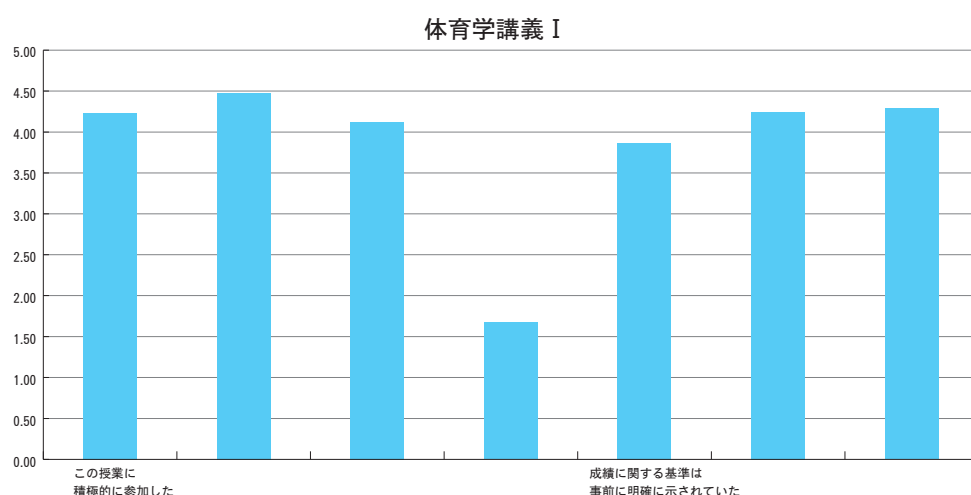
表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧（シーズンスポーツ）

種目名	回答数	回答率	この授業に積極的に参加した	授業の内容を十分に理解できた	教員の説明はわかりやすかった	学修の負担が大きすぎた	成績に関する基準は事前に明確に示されていた	全体としてこの授業に満足している	この授業を他の学生にもすすめたい
アウトドアレクリエーション	5	12.2	4.80	5.00	5.00	1.80	3.00	4.60	4.60
セーリング（ヨット）	2	10.5	5.00	5.00	5.00	1.00	5.00	5.00	5.00
ビーチバレー	4	21.1	5.00	5.00	5.00	2.50	3.00	5.00	5.00
マリンスポーツアクティビティ	5	9.1	4.00	3.80	4.60	2.60	4.40	3.40	3.80
Nature&Trail（山岳）	2	12.5	5.00	5.00	4.50	2.00	4.50	5.00	5.00
スキー	39	72.2	4.82	4.79	4.97	1.74	3.79	4.97	4.95
スケート	18	56.3	4.94	4.72	5.00	2.17	3.72	4.83	4.89
シーズン全体	75	平均	4.79	4.76	4.87	1.97	3.92	4.69	4.75
		標準偏差	0.33	0.41	0.20	0.50	0.71	0.54	0.41

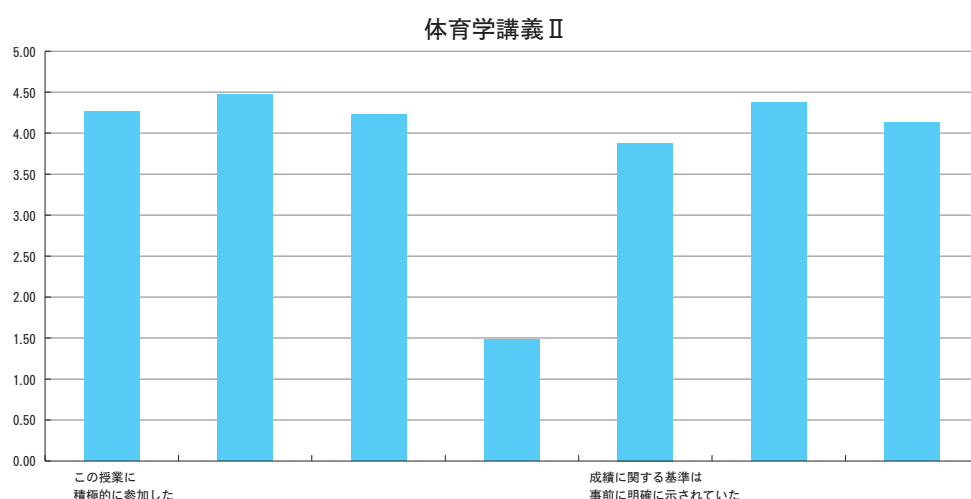
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価についての結果を図Ⅲ-1-4（春学期）、図Ⅲ-1-5（秋学期）に示した。多くの項目において平均値が4点をこえる肯定的評価が得られている。特に、「授業の内容を十分に理解できた」は高い値を示した（春：4.48±0.49、秋：4.47±0.54）。

一方で、ウィークリースポーツおよびシーズンスポーツと同様に「成績に関する基準は事前に明確に示されていた」（春：3.87±0.54、秋：3.88±1.11）は他の項目と比較して低い値を示しており、講義においても学修計画と併せた成績評価基準の明確な説明を行うことが、体育科目における共通の課題である。



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義全体平均）



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義全体平均）

3. 通信教育対象科目

1) 体育理論

レポートおよび試験問題の出題・採点を、野口和行君、村松憲君、稲見崇孝君で担当した。

2) 体育実技スクーリング

2024年8月5日から10日に3種目を日吉キャンパスにて実施した。これら3種目はいずれも「スポーツセミナー」という2単位の授業であった。これらの種目の履修者数等を表Ⅲ-1-12に示す。

表Ⅲ-1-12. 2024年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種 目 名	担当者	定 員	履修者数	充足率
スポーツセミナー	スマートフィットネス	山内 賢	25	30	120%
	水泳	鳥海 崇	30	33	110%
	フットサル	福士 徳文	25	30	120%
合 計			80	93	116%

4. 塾内における授業担当

日吉および三田において開講される体育研究所設置の体育科目及び通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部の

設置科目の開講についても協力している。2024年度の他学部設置科目及び担当者をⅢ-1-13に示す。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
体育 1	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜 4 時限
体育 2～5	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜 3 時限 秋学期月曜 2・3 時限
人体の科学	佐々木玲子 村山 光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限
健康マネジメント特論Ⅰ	稲見 崇孝	大学院健康マネジメント研究科	春学期（特定期間集中）
健康マネジメント特論Ⅱ	稲見 崇孝	大学院健康マネジメント研究科	秋学期（特定期間集中）
健康マネジメント合同演習Ⅰ	稲見 崇孝	大学院健康マネジメント研究科	春学期（特定期間集中）
健康マネジメント合同演習Ⅱ	稲見 崇孝	大学院健康マネジメント研究科	秋学期（特定期間集中）
運動生理学	稲見 崇孝	大学院健康マネジメント研究科	春学期（集中講義）

Ⅲ－２．スポーツイベントの開催

１．塾内競技大会

１）塾長杯バドミントン大会

- １．開催日：2024年6月15日（土）
- ２．会場：日吉記念館
- ３．開催時間：10:00～15:00
- ４．参加チーム数
チャンピオンリーグ：8チーム
アクティブリーグ：10チーム
（内教員1チーム）
エンジョイリーグ：10チーム
- ５．参加人数：約70名
（登録選手数54名、審判員7名、教職員約9名）
- ６．試合数：66試合
（最高5試合、最低4試合）
- ７．協力：SMASH（バドミントン）
- ８．参加チーム説明会
2024年6月10日（月）
オンライン（メールにて通達）
- ９．応募チーム数：28チーム
（内教員1チーム）
- 10．表彰チーム
チャンピオンリーグ 優勝：I・H ペア
2位：K・N ペア
3位：I・Y ペア
アクティブリーグ 優勝：K・S ペア
2位：S・T ペア
3位：S・T ペア
エンジョイリーグ 優勝：T・M ペア
2位：H・W ペア
3位：S・M ペア
- 11．コメント

本大会は初めての開催ということもあり、多くの学生が参加し、改めてバドミントンの人気を実感する大会となった。試合は全28ペアが3つのリーグに分かれ、各リーグの総当たり戦を実施し、21点先取の1ゲームマッチとした。どのリーグ

も白熱した試合展開が多くみられ、特にチャンピオンリーグでは、スピード感あふれるプレーが続き、観客も息をのむような場面が数多く見られた。サークルの学生スタッフが準備や審判などの運営に協力してくれたおかげで、初開催にも関わらず円滑な運営が実現した。



２）塾長杯バレーボール大会

- １．開催日：2024年10月12日（土）
- ２．会場：日吉記念館
- ３．開催時間：10:00～15:00
- ４．参加チーム数
チャンピオンリーグ：8チーム
エンジョイリーグ：20チーム
（内教員2チーム）
- ５．参加人数：約190名
（登録選手数160名、審判員8名、アナウンス2名、教職員約20名）
- ６．試合数
チャンピオンリーグ：16試合
エンジョイリーグ：30試合
- ７．協力：KFC、放送研究会
- ８．参加チーム説明会
2024年10月7日（月）
16:30～17:00
オンライン
- ９．応募チーム数：28チーム
（内教員2チーム）
- 10．表彰チーム
チャンピオンリーグ
優勝：KFC
2位：JVC
3位：小橋ゼミ

エンジョイリーグ

Aリーグ優勝：TKS

Bリーグ優勝：KVC4

Cリーグ優勝：火金

Dリーグ優勝：たこのこ

Eリーグ優勝：教員B

11. コメント

今年度のバレーボールは、過去3年間で最多の参加チーム数を記録した。特にパリオリンピックでの日本代表の活躍が大きな影響を与え、バレーボールへの関心が高まったことが要因の一つと考えられる。

チャンピオンリーグでは、レベルの高いプレーが続出し、決勝戦では激しい攻防線が繰り広げられた。一方、エンジョイリーグでは、初心者から経験者までが一緒にプレーを楽しみ、各チームが互いに声を掛け合いながら試合を盛り上げた。

また、放送研究会による実況が大会の雰囲気をさらに盛り上げ、観戦者も試合に引き込まれるほどの熱気に包まれた。今後も大会の継続とさらなる発展を目指していきたい。



3) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日：2024年12月14日（土）

2. 会場：日吉記念館

3. 開催時間：10:00～15:00

4. 参加チーム数：16チーム

（内教員1チーム）

5. 参加人数：約135名

（登録選手数115名、審判員8名、アナウンス2名、教職員約15名）

6. 試合数：31試合

7. 協力：

フットサル倶楽部エルレイナ、
放送研究会

8. 参加チーム説明会

2024年12月9日（月）

16:30～16:45

オンライン

9. 応募チーム数：16チーム

（内教員1チーム）

10. 表彰チーム 優勝：雷門中

2位：須田ゼミ

11. コメント

本大会は、昨年の募集数を超える、16チームがエントリーし、4ブロックに分かれて1試合10分の予選リーグを実施した。その後、各ブロックの順位に基づき、1試合15分のトーナメント戦が行われた。トーナメント戦では各チームの実力が拮抗し、例年以上の熱戦が繰り広げられた。中には延長の末、PK戦にもつれ込む大接戦となり、会場は大いに盛り上がった。また、試合の合間には交流戦を行い、選手同士が親睦を深める機会も設けられた。

放送研究会の実況によって大会の熱気はさらに高まり、競技者だけでなく観戦者も楽しめる大会となった。今後も、より多くの学生にフットサルの魅力を伝えられるよう、運営体制の充実を図っていききたい。



4) 新春塾内卓球大会

1. 開催日：2025年1月18日（土）

2. 会場：スポーツ棟（体育研究所）

地下1階卓球場

3. 開催時間：10:00～13:00
4. 参加者数：約30名
(塾生11名、教職員及び卒業生19名)
(シングルス23名、ダブルス10ペア)
5. ゲーム形式
11点先取3セットマッチ
6. 表彰チーム
ダブルス(中・上級の部)
優勝：T.K.(塾員)
M.H.(教職員)
ダブルス(初級の部)
優勝：M.T.(理工修士2年)
H.T.(理工修士2年)
シングルス(上級の部)
優勝：T.K.(塾員)
シングルス(中級の部)
塾生優勝：K.Y.(文学部)
教職員優勝：K.R.(教職員)
シングルス(初級の部)
塾生優勝：A.E.(理工学部)
教職員優勝：N.S.(教職員)
7. コメント

今年度も教職員や卒業生の方々にご参加いただき、和やかな雰囲気の中で白熱した試合が展開された。ダブルスでは、初めて組むペアや、学生と教職員が世代を超えて組む場面も多く見られ、競技の枠を超えた交流の場としても有意義な大会となった。

上級の部では、選手同士がサインを出し合い、プレーの確認をするなど、戦略的な試合展開が見られ、経験者ならではの高度なラリーが繰り広げられた。一方、初級の部では、試合を重ねるごとにプレーが上達し、参加者自身が成長を実感できる場面も多かった。しかし、より初心者向けの「温泉の部」を設けることで、さらに幅広い層が気軽に参加できる可能性も考えられた。

卓球は生涯スポーツとして多くの人に親しまれており、今後も初心者から経験者までが楽しめる場として、また、世代を超えた交流の場としての役割を強化しながら、継続的に開催していきたい。



2. 公開講座

1) 音楽に合わせて♪キッズ新体操体験

1. 日程：2024年7月27日(土)
2024年8月3日(土)
2. 会場：日吉記念館多目的スタジオ
3. 開催時間：11:00～12:00
4. 講師
田中琴乃(北京・ロンドンオリンピック新体操日本代表/フェアリージャパンPOLA公式アンバサダー)
清水花菜(体育研究所助教)
5. 参加者数：約39名
6. 受講料：500円
7. コメント

昨年に引き続き、幼児～小学校低学年の子どもを対象に「音楽に合わせて♪キッズ新体操体験」をテーマに公開講座を開催した。本講座は2回コースで実施し、1回目は柔軟体操やリズム体操、手具体操を中心に行い、2回目は音楽に合わせて楽しく踊るミニ発表会を実施した。元新体操日本代表選手の田中さんを講師に迎え、音楽に合わせて踊る楽しさや、体を使って表現する喜びを子どもたちに伝えることができた。新体操は一般的に「女性が行うスポーツ」という印象が強いが、男子新体操は日本発祥の競技であり、国内でも人気が高まっている。今

回の講座では、男の子も参加し、性別に関係なく新体操の魅力を体験してもらえたことが大きな成果の一つである。

また、今年も横浜日吉新聞に本講座の記事を掲載いただき、募集定員にほぼ達する形で開催することができた。この場をお借りして、関係者の皆様に心より感謝を申し上げたい。



3. 所内施設の開放

1) 協生館トレーニングルーム開放

1. 期 間：

【春学期】 2024年5月8日(水)～
7月17日(水)

【秋学期】 2024年10月16日(水)～
2025年1月24日(金)

2. 曜日時間：

【春学期】 月・火(14:45～16:15)
水(16:30～18:00)

【秋学期】 水・金(14:45～16:15)

3. 担当者

【春学期】

月：清水花菜(体育研究所助教)

火：梅本雅之(体育研究所助教)

水：T.Y.(理工学部数理学科2年)

【秋学期】

水：T.Y.(理工学部数理学科2年)

金：清水花菜(体育研究所助教)

梅本雅之(体育研究所助教)

4. 利用者数：139名

(春学期88名、秋学期51名)

5. コメント

昨年度に引き続き、1日あたり最大15名の人数制限を設けてトレーニングルームを開放した。全体の利用者数は昨年よりも20名ほど増加し、学生たちは体づくりを目的にトレーニング機材を活用しながら継続的に利用していた。利用者数は昨年とほぼ同じ水準で推移したが、さらなる利用促進を目指し、より多くの学生に活用してもらえるよう周知していきたい。

2) 協生館プール開放

1. 期 間：

【春学期】 2024年5月21日(火)～
7月12日(金)

【秋学期】 2024年10月1日(火)～
12月27日(金)

2. 曜日時間：火・木の昼休み

(12:15～13:00)

3) 第3校舎下バレーボール・フットサルコートの貸し出し

1. 期 間：

【春学期】 2024年5月8日(水)～
7月17日(水)

【秋学期】 2024年10月16日(水)～
2025年1月24日(金)

2. 曜日時間：月・火・金

(15:00～17:00)

3. 利用団体数：8団体

(春学期2団体、秋学期6団体)

4. コメント

約10年ぶりに多目的コートの貸し出しを再開した。春学期は利用団体が少なかったものの、秋学期は団体のリピート利用が多く、ほぼ全ての枠が埋まり、継

続的な利用が見られた。学生にとって、運動できる場所の確保は依然として課題であり、こうした施設開放は健康維持や交流の場として大きな役割を果たしていると感じる。来年度以降も、より多くの学生が活用できるよう、施設開放の環境を整えていきたい。

Ⅲ－３．他機関との連携

１．一貫校連携

Ⅰ．幼稚舎館山遠泳合宿

- １．日 程：2024年 8 月25日（日）～29日（木）
- ２．場 所：千葉県館山市見物海岸
- ３．対 象 者：6 年生
- ４．ボランティアコーチ：鳥海崇、梅本雅之
- ５．参加者数：約30名

Ⅱ．幼稚舎体育特別授業（館山日帰り安全水泳実習）

- １．日 程：2024年 9 月 2 日（月）～4 日（水）
- ２．場 所：千葉県館山市見物海岸
- ３．対 象 者：6 年生
- ４．ボランティアコーチ：鳥海崇、梅本雅之
- ５．参加者数：約30名

２．体育会支援

須田 芳正	体育会参与
吉田 泰将	剣道部師範、医学部剣道部師範代行
鳥海 崇	体育会副理事
坂井 利彰	庭球部部长
奥山 静代	体育会アドバイザー
永田 直也	体育会アドバイザー
福士 徳文	体育会副理事、体育会アドバイザー
稲見 崇孝	体育会アドバイザー
東原 綾子	体育会副理事

IV. 業務活動記録

IV. 業務活動記録

2024年度総務分野関係報告

1 人事

- (1) 就任（昇格）
稲見崇孝君（准教授）
福士徳文君（准教授）
- (2) 就任（新規）
東原綾子君（専任講師）
梅本雅之君（助教（有期））

2 塾内役職

- (1) 大学寄宿舍委員会委員
野口和行君
- (2) 大学教養研究センター運営委員
須田芳正君（所長）
- (3) 大学教養研究センター所員
佐々木玲子君・石手 靖君・村山光義君・
加藤大仁君・村松 憲君・山内 賢君・
野口和行君・吉田泰将君・坂井利彰君
- (4) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
村山光義君
- (5) 体育会副理事
鳥海 崇君
福士徳文君
東原綾子君
- (6) 体育会参与
須田芳正君（所長）
- (7) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (8) 立科山荘運営委員会委員
野口和行君
- (9) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
村松 憲君
- (10) 日吉記念館運営連絡協議会委員
蝮谷体育館運営連絡協議会委員
グラウンド・プール連絡調整会委員
須田芳正君（所長）
鳥海 崇君
福士徳文君

- (11) 慶應義塾研究倫理委員会委員及び慶應義塾研究倫理委員会研究倫理審査委員会委員長
鳥海 崇君
- (12) 大学保健管理センター運営委員
須田芳正君（所長）
- (13) 大学保健管理センター人事委員会委員
須田芳正君（所長）
- (14) 大学スポーツ医学研究センター運営委員
須田芳正君（所長）
- (15) 日吉キャンパス衛生委員
山内 賢君
- (16) Hiyoshi Research Portfolio（HRP）運営委員
須田芳正君（所長）
- (17) 通信教育部学務委員
鳥海 崇君
- (18) 教学マネジメント推進センター所員
村山光義君
- (19) KEIO SPORTS SDGs（慶應スポーツSDGs）センター副センター長
稲見崇孝君

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
須田芳正君
- (2) 副所長
坂井利彰君
- (3) 人事委員会委員
須田芳正君・佐々木玲子君・石手 靖君・
村山光義君・加藤大仁君・村松 憲君・
山内 賢君・野口和行君・吉田泰将君・
加藤幸司君・坂井利彰君
- (4) 学習指導主任
村山光義君
- (5) 学習指導副主任
鳥海 崇君
- (6) 総務委員会委員長
村松 憲君
- (7) 教育委員会委員長
村山光義君
- (8) 研究委員会委員長
加藤大仁君

- (9) スポーツ振興委員会委員長
野口和行君
- (10) 活動報告書編集委員会委員長
村松 憲君

4 その他

特記事項なし

(主事 渡部隆志)

2024年度活動報告書

2025年 5 月発行

[非売品]

編 集：活動報告書編集委員会

村松 憲（委員長）

福士 徳文 東原 綾子

清水 花菜 梅本 雅之

発 行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4 - 1 - 1

制 作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 港区三田 2 - 15 - 45